

---

# DQNと喪少女がBLファンタジーにトリップした

一夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DQNと喪少女がBLファンタジーにトリップした

### 【Nコード】

N1555X

### 【作者名】

一夜

### 【あらすじ】

DQNと喪少女はBLファンタジーにトリップしてしまった。不幸なことに豪華絢爛煌びやかな攻めたちがDQNを愛してしまった。不部外者扱いの喪少女だが、嫉妬に狂ったふつくしい攻めたちから嫌がらせを受ける。主役は喪少女で、BL表現がありますがギャグの範囲内です（のつもりです）。

## プロローグ

「君には何に代えがたい程の価値がある。そう、王であるこの僕よりも」

空を手で切り熱弁する美男王は膝に少年を乗せている。少年はあつと驚くようなキツネ顔だった。王は優美な指でその釣り上がった目尻をなぞり、愛くるしさに笑みを零す。

「離せよこの変態野郎が！　つーか冗談でもそんなことを抜かす国民が哀れで仕方ねえわ！　いっそテメーよりはまともな神経持ちの弟に王位譲ってやれ！！」

少年DQNは髪の毛の振りかざし暴れる。彼の髪は脱色しプリン状態となっていた。

生粋の金髪を持つこの王は体を鍛えている隠れマッチョである。その為、DQNがいくら抵抗しようと身動きすら取れないのであった。

「君のために命を捨ててしまうことなど全く躊躇しないが、僕の前で平然と他の男の名を口ずさむ君を見るとそうもいかないと思わされる。他の男になど思考の片隅にないくらいに僕で染め上げなく」  
「きめえし人の話聞けよおおお！！　ああああああ聖騎士  
iiiiiiii助けてくれええええええ！！！！！！」

傍で彼らのやり取りを忌々しく見ていた聖騎士。立場上為す術がなかった彼だが、命令を賜りちゃっかりとDQNの腕を掴み口を開く。

「僭越ながら王、御神賜様が王を厭うております」

「ふん、男の嫉妬は見苦しいな」

「ありのままの事実を述べているまでです」

「そのとーりっそのとーりだ！」

照れることなかれ、とのたまい唇を寄せようとした王。DQNは恐慌状態寸前となり、奇声を上げ聖騎士へ手を伸ばす。

聖騎士は体内で歓喜の念が四方へとパアッと広がる感覚を味わった。味わいながらも、その念を押し殺し、血が止まる勢いで両手で覆い、王とDQNの間へと入った。

その途端、DQNの体が宙へ浮いた。王と聖騎士が彼を呼びながら手を伸ばす。DQNは歓喜した。DQNにとってはこの足がつかない不安定な状態だろうが、悪夢のような野郎の腕の中よりはずっとマシだった。

しかしその思いもつかの間、DQNの体はまた新たな男の腕の中へ飛んでいったのだった。

「兄さん、そんな強引じゃ嫌われちゃうよ？」

DQNを腕に優美な笑い声と共に現れたのは、これまた赤毛の美青年だった。魔法使い兼弟殿下である。

彼はDQNの尻をついっとなでた。

「うげえっ何すんだよこのっ！」

DQNは腕を振り上げようとする。だがDQNの体は石のように動かなくなってしまった。

「助けて上げたんだからこれぐらい、許してよ？ ね？」

王弟殿下は、上目遣いでDQNの顔を覗きながらも甘く美しい笑い顔を見せたが、男であるDQNには逆効果だった。鳥肌を立てながら絶叫する。

「だれかまともな奴はいねえのかよおおお！！ 母さん助けてくれええええええ！！！！」

ふう、とため息が広い王の間を響かせた。

現れたのは、王と異母兄妹である世にも美しい姫だ。青み帯びた水色の髪は流星の如く輝きを放ち靡かせる。彼女の小さな顔に埋めこまれた碧眼は大きく、鼻は控えめに尖り、唇は薔薇を乗せたように赤い。

「んもうっ弱いものいじめは辞めて！ どきゅんちゃん涙目になってるじゃない！」

姫の顔には正義感からくる怒気を滲ませている。美しい顔に見とれながらも、DQNのプライドは粉々になった。

ひっそりと柱の影で一人の少女がそれらの様子を眺めていた。彼女の仮の名前は喪少女。

この小説の主人公でもある。

## プロローグ（後書き）

次から喪少女視点になります

## いじめられっ子喪子

「おいブス、俺らの代わりにこれやっつけよ」

「さぼつたら後でどんな目にあうかわかるよな？」

「掃除するしか価値がねえんだからしっかりやれよ」

目の前にははっと息を飲むほど美しい色素の薄い少年達。

まるでシンデレラの意地悪な義姉のようだと思っていると、床を拭いていた雑巾を顔面に投げ付けられました。

「ついでにお前の汚ねー顔も拭いとけ！」

「お前ひでー」

「ひやははは」

異界の雑巾も日本の雑巾も香りは同じなのです。しみじみと思っていると彼らは軽やかな笑い声を上げ行ってしまいました。

顔に追突し落ちてしまった雑巾を拾い、擦り始めます。

潔癖症の王は毎日拭くようにと指示なさっていますが、大半の床は汚れがありません。

何しろ広すぎるので、使われる面積が少な過ぎるのです。

皆は裸眼でわかる程度の汚れのみを拭くのですが、わたしは落ちて着かないので目に広がる全ての空間を拭きます。

あまり意味をなさないことは理解していますが、これは性分なのです。

水が無くなったので外に行こうとすると、彼の声が耳に入りました。

王座のある方向です。

ちらりと柱から覗き込むと、王様、聖騎士様、弟殿下様、妹姫様、そして我が同郷人のDQNさんがいらっしやりました。

ギリシア彫刻も全裸で逃げ出す眉目秀麗の皆さんが、一人場違いともいえるDQNさんを取り囲んでいます。

ちよつと・・・いえ、かなり絵画的に不自然さを感じざるを得ません。

わたしがいうのもなんですが、DQNさんは現代日本の基準でいうと不細工の部類に入ります。

釣り上った目尻、長く広がった低い鼻、どこかパーツのバランスが崩れた大きな顔。

浮世絵に描かれた人物そのものです。

しかし、この世界ではなんと絶世の儂げな美少年に該当するそうです。

王様や聖騎士様は美しいとされるこの世界で、真逆の特徴の彼が美しさで彼らを上回るとは美の基準がよく理解できませんね。

本来ならうはうは幸せハーレムランドだったでしょう。もし彼の周囲が女性ばかりだったのなら。

女性にはほぼ縁のなかつたDQNさんです。向こうの世界では、好きだった女性がイケメンのツレに皆惚れてしまっていたそうです。そして女は皆イケメンがいいのかと憎しみめいたものも持っていたみたいで。

その鬱憤が女の最下層であるわたしに向かいました。

すれ違い様に舌打ちや悪口なんて当然の日々で、いきなり小突かれたり、直球で罵られたり、影で色々言われたりしました。仕打ちには慣れているわたしですが、辛いと言われたら辛かったかな、と



思います。

上記にある彼がわたしを苛めた原因というのはただの直感と思いつき込みに過ぎないのかもしれませんが、彼がわたしの容姿を罵る時の顔は、いつも優越と悲痛が入り混じっているように見えました。

言われているわたしが遣る瀬無い気持ちになるくらい、どこか悲愴な叫びに見えたのです。

そんなこんなでDQNさんとわたしはいじめっこといじめられっこという歪な関係が築かれたのでした。ちゃんちゃん。

少し話が脱線してしまいました。何でも王様は大の女性嫌いだそうで、この世界の城には妹姫様とお付きの侍女を除いて女性が一人もいません。

この城を支えるのは多くの美少年たちです。何故美少年なのかというと、王の趣味でしょう。王がソツチ系のせいなのか、この城では平然と男性同士の恋愛が成立しています。

腐女子の皆さまが片手で鼻を押さえて悶絶するくらいの環境下なのでしょうが、残念なことにわたしはそっち方面への興味が一切ありません。

たまにあんな場面に出くわして、いやんつと心が揺さぶられることもなく、日常の一端として受け止めるだけで、わたしにとっては刺激も糞もありません。

そんなこんなで御神賜く神の賜りものゝである絶世の美少年は王様を初め、多くの男性に言い寄られることになったのです。

わたしも一応彼と同じ所から召喚された、ということとで御神賜らしいのですが、全くそのような扱いは受けずむしろ憎まれています。下働きの少年たちにまで使われているような現状です。

ふらふらとした足取りで水桶を運び、また腰を下ろし作業を続行させようとしていた時でした。いきなり長い足が視界に入りました。そして、水桶を蹴ってしまったのです。

「あっ」

びちゃあ、と床は水浸しになってしまいました。足の持ち主を見上げると、そこには王様がいらっしやりました。相変わらず迫力のある美貌です。

「お前のような醜い者が我が城の足場を拭くとは・・・却って汚れてしまう。やめろ」

「はい」

DQNさんに向ける時とは180度異なる冷たい青の目。どこか背筋が寒くなります。

わたしは水桶を持ち、立ち去ろうとしました。

「待て」

「はい」

その声にわたしは振り向きました。

「こんな水たまりをお前は放置するのか？」

「えっ」

「今すぐ拭け。いいな？」

「かしこまりました」

よくわからないな、と思いつつまた腰を屈めて布に水を吸わせ片

付けました。

## 美しい妹姫様とDQNさん

きゅつきゅつと床を磨いていきますと、水面のように人を映し出すようになります。

これが嬉しくて楽しくて、押しつけられたとしても喜びを感じられるのです。

わたしと同じく御神賜様であるDQNさんの待遇とは天と地程の差がありますが、わたしはわたしなりの楽しみを見つけ、それにのめり込んでいこうと思ったのでした。

フンフンと鼻歌しながら水桶に雑巾を絞ろうとすると、水桶に人影が出来ていることに気付きました。

見上げると、そこには何やら汚らしいものを見るような表情をした聖騎士様がいらっしゃりました。

「御神賜様をお見かけになりませんでしたか」

首を振りました。また彼が逃げたのでしょうか。

聖騎士様の眉間の皺は深まり、精悍なお顔立ちは苛立ちの色に支配されていきました。

「例え貴方がどんなに醜くとも御神賜様です。そのような下賤の者の真似はお止め下さい」

一度手を止め、聖騎士様を見上げました。『ゲセン』という単語を知らなかったからです。

じつと見つめていると、彼は口に手を抑え、「吐き気がする」と言っただけで行きました。

わたしの容姿はそんなにも見苦しいものなのでしょうか。

さすがに、少し悲しい気分になります。

「お前また仕事押し付けられたのかよ？」

ふいに背後から掛けられた苦笑と嘲笑まじりの声は、日本でも慣れ親しんだものでした。

DQNさんが来て下さったのです。

わたしはいつものように何も喋らないでいると、彼は飽きたように床に寝そべり始めました。

「あーあ、もう嫌になっちまう。もう一カ月だぞ。あの変態王に帰らせるといってもそのような術はないの一点張りだし」

あまり真剣味が感じられないように聞こえますが、真実DQNさんはうんざりしているのです。

「常に僕の傍におれ」が口癖の王様は寢床までDQNさんと共にし、やむなく王様が視察の為にDQNさんから離れても聖騎士様が常に護衛しているのです。

それに加え、魔法使い兼弟殿下様がいつのまにか背後にいてセクハラをしてくるそうです。

DQNさんには、1人になれる時間が全くと言っていい程ありません。

しかし、DQNさんはこうしてたまに1人でここに來ます。

それは、聖騎士様を出し抜いているからだそうです。

武勇伝を話すことが三度の飯よりも好きなDQNさんは教えてくれました。

聖騎士様をじっと見つめ、顔を少し近づけます。

聖騎士様がぼかんとした顔を見てとった瞬間、股間に鋭い一撃を与えるそうです。

護衛としてはあるまじき失態でしょうが、好きな人の前では無防備になってしまう聖騎士様が少し微笑ましく思えます。

「ところでさ、最近姫さまと会ってる？」

姫さま。王様の妹姫様のことです。

「はい。昨日お会いしました」

「あっそ」

妹姫様は、こんなわたしの所までわざわざ訪ねてきてくれてとても優しくして下さります。

この城での女性は晴れの時に雨が降るくらい珍しいからでしょう。

「やっぱりここにいたーっ」

鈴のように軽やかで凜とした声。

妹姫様です。妹姫様がこちらへ駆け寄って来ました。

彼女の透き通る水色の毛束がさらさらと乱れ輝きを放ちます。

大きな碧眼には彼女の生き生きとした感情が映し出されています。

DQNさんが待ってました、と言わんばかりに立ちあがり彼女の元へ歩きます。

「久しぶりですね、姫さま」

「あつ！ どきゅんちゃんもここにいたんだねえ！」

どきゅんちゃん、と言われDQNさんの顔が引きつりました。

ここへ呼び出された時、わたしは召喚陣の上で気絶していた彼に  
対し思わず『DQNさん大丈夫ですか?!』と呼びかけてしまっ  
たがために、そう定着してしまったのです。

『何だよドキュンって！俺の名前知らねえのか?!』と怒鳴られ  
てしまいましたが、幸運なことに、彼はその単語の意味を知らない  
ようです。

結局は『糞イラつくぜ。まああんな奴らに俺の名前を呼ばれたく  
ないから許してやる』と許されましたが、妹姫様に偽りの名前で呼  
ばれることは嫌なようです。

「あの、姫さま。俺の名ですがね、」

「お掃除やってないで私の部屋でお菓子食べましょうよお！」

妹姫様の壊れてしまいそうな程繊細な白い手がわたしの汚れた手  
を掴みます。

DQNさんからの痛いほどの視線を感じながら、わたしは自然に出  
た自分の愛想笑いを意識しました。

「頼まれたことなので終わらせないといけません。あと十分ほど  
かかってし」

「じゃあわたしも手伝うわ！」

「いえっそんなことはさせられません。・・・一人でやりたいの  
です」

お姫様に掃除の手伝いはさせられない、と断ったのですが、妹姫

様は嫌な顔一つせず花が咲くが如く笑いました。

「じゃあここで応援してるねっ」

そう言い、妹姫様は、一方的に今日の出来事をお喋りし始めました。

DQNさんはまた名前の訂正をできなかったにも関わらず、妹姫様のふつくしい笑顔を見て幸せそうです。

王様たちは勘違いしていらっしやりますが、DQNさんがたまにわたしの元へ来るのは、わたしではなくわたしを訪ねに来る妹姫様に会うためです。

DQNさんは、王の妹姫様に恋をしているのです。

王様達が過度な束縛をするのも、DQNさんがわたしに惚れている！と壮大な誤解をしている為もあるようで。自縛しているとは彼は思わず、何度もここへ訪ねてきますので、王様たちのわたしへの嫌がらせも増えてきます。

常識的に考えて警戒すべきは醜いわたしではなくむしろこの美しい妹姫様だと思うのですが、どうということなのでしょう。

「姫さま！ そんなところで何をしていらっしやりますか！」

血相を変えて妹姫様付きの侍女さんがやってきました。妹姫様は、床に座り込んでいます。

王族の女性としてあまりにはしたない所作です。

「だつてえ。彼女に会いたかつたんだもの」

妹姫様は半泣きでの外れなことを言いました。侍女さんに睨まれ、



なんとなく泣きたい気分になります。  
男の敵意と女の敵意。前者は割と平気ですが、後者はなんだか苦手  
です。

## 弟殿下様

女からの敵意。

男からの仕打ちにはへこたれないわたしですが、これにはとても弱いのです。

もし、わたしに女性としての意識があれば、男の敵意の方が苦手だったかも知れません。

ここで言う女性としての意識とは、『男』の目を意識する意味を指しています。

異性から評価される女としての性は、男からみた女としての好ましさと同義です。

わたしには、その女性としての意識が皆無に等しいのです。ですので、わたしはわたし自身を、男からみた『女』と捉えていないのです。

といっても、わたし自身が生物学的女であることには変わりありません。

日本人ならば、日本人ならではの特有性に深く同調してしまう。それと同様で、わたしは女の抱く思い、感情に深く同感してしまうのです。

どうせ、異性であり別種ともいえる男には、生物学上女であるわたしを理解できない。

そう思って、わたしは、わたしに敵意を向けてくる男による幾多もの感情に対して、自分自身にも平気なフリができます。そうやって、僅かながらの自尊心を守っているのです。

しかし、同種でもある女性には。

衣で隠した穴をいとも容易く剥がし、醜いところも虚勢を張っている所も全て見透かされている気がするのです。

そのことはわたしの尊厳を、自尊心を踏みにじり辱めるのです。

DQNさんは、わたしとは逆に、悲しい程に男性としての意識を持っていくように思えます。

だからこそ、女に近づいては傷ついていたのです。

男としての尊厳を持っているからこそ、異性に認められない悔しさを持つのです。

DQNさんとわたしは異性に認められないという点では似ているようですが、それに対する受け取り方は全く異なります。

妹姫様は、わたしの掃除が終わらない内に侍女に連れられ、自室へ戻ってしまいました。

終わったら来てと言われましたが、あまり行く気にはなりません。逆にDQNさんは妹姫様の部屋へ訪ねたいようで、わたしの掃除を手伝ってくださりました。

「床拭き懐かしいな、中学以来」

高校では月1の割合で掃除当番となるはずですが、DQNさんは毎回サボっているのでしょうか。

DQNさんらしいです。

クスリ、と思わず笑ってしまいました。

「こつこつ拭いていると、思い出します」

そう言い、DQNさんに視線を向けました。すると、DQNさんの細い目は見開かれていました。

「すみません」

身分不相応にも、DQNさんにわたしは自分の話をしようとしてしまった。

DQNさんとわたしは対等ではないのに。

自分の軽はずみに後悔していると、DQNさんは何ともいえない表情をし、わたしに話を促しました。

どこか照れたように。

わたしは話しました。

わたしが密かにDQNさんに恋をしたきっかけの話を。

わたしは、DQNさんからの攻撃の標的とされ、いじめは男子を中心に広まりました。

女子は一握りを除いて大人しい子ばかりでしたから大抵の女子は自分が次なる標的にならないよう小さく丸まっていました。一部の女子は男子に便乗しわたしを影でいじめるようになったのです。

あの時も、男子に押し付けられた床掃除をしていました。

放課後で外は雨の教室。

雨に濡れた土の匂いがわたしは好きでした。

『おいブス』

ドスの効いた声にわたしは面を上げました。その途端、バケツに入った水を被せられました。

キヤハハ、という大人数の笑い声。

わたしを見下ろしているのは、どこか神経質な臭いを漂わせる美人な女の子でした。

『反応したってことは自分がブスだって自覚してんだろっね！笑える』

取り巻きはそう言い、はやし立てるように爆笑しました。

小学生みたいだ、と思っていると美人女子に前髪を思いつきり掴まれました。

『お前さあ、その顔だよ。むかつくんだよ。存在自体が罪。ねえ、償ってよ？』

キヤハハ、という声が響き渡ります。

前髪を掴まれたまま、廊下を渡り、ギョツとした顔をした女子と目が合い、男子トイレに連れ込まれました。

『汚物掃除中です。誰も入らないでください』

取り巻きが廊下に向かってそう叫び、ドアを閉めました。

『どーするよ？便器の水飲ませるとか？』

『でもそれありきたりじゃあん？もつとすごいことしよっよー！』

『モツプを突っ込ませて公開処刑とか面白くない？』

見た目は天使の幼き女子たちは、いかにわたしを屈辱的に、酷い目に合わせられるかの相談をします。

わたしは、これから何が行われるのか不安でした。

こんなわたしにもプライドはあるのですから、絶対に泣きませんし無表情を保ち続けます。

でも、内心は怖くて、泣きたかったです。

許して、と外聞もなく乞いたかったです。

『男子呼んで来させよ!』

『それいいね!』

素晴らしい、取り巻きの一人がトイレから出て、男子数名を連れてきました。

一人は名も知らない男子と、もう二人は馴染みの深いDQNさんとマブダチのイケメンさんです。

『ちょっとー、何やってんのこれ。』

イケメンさんが、水を被ったわたしを見つめ半笑いをします。

『何、ダメだっつーの?』

美人女子がイケメンさんを睨み、イケメンさんは『そんなこと言っていないよ』と誤魔化すように笑いました。

優しくて知的といわれているイケメンさんでも、クラスの嫌われ者相手となるとこの反応です。

『で、俺ら呼んだのって何？』  
『こいつヤツちやってよ！』

美人女子の発言に、ぼかんとしました。  
まさかそこまでの犯罪行為を平然と命令するとは。

『それが嫌なら口に・・・キヤツ！』  
『ふざけんなよ』

DQNさんが美人女子の襟を掴みました。取り巻きがキヤーキヤ  
ーと声を上げます。

『女の子に何やってんの?!最低!』  
『死ね!』  
『不細工の分際で調子にのんなよ!』

美人女子は、取り巻きたちと同様にDQNさんに暴言を吐きます  
が、声は震え、表情にはDQNさんへの怯えが出ています。

結局は、イケメンさんがDQNさんを宥め、泣き出した美人女子  
を取り巻きが慰めるような形で場は収束しました。わたしは放置さ  
れ、掃除の残りを片付け、帰ったのでした。

DQNさんが彼女達の言うことを聞かなかったのは、彼女たちが、  
以前からDQNさんの悪口を言っていて、彼女たちの命令を聞くこ  
とが気に入らなかつたのでしょう。

ただ、それでも。

話をし終わり、わたしはDQNさんにずっと言いたかったお礼を言いました。

すると、DQNさんが乾いたような笑いをしました。

「お前ってバカ？」

「何故ですか？」

「そもそもお前がいじめられるようになったのも俺がお前をいじめようになつたからだろ」

「そうですね」

「意味わかんねえよ！」

確かに、わたし自身意味がわかりません。

いじめのきつかけとなつたDQNさんに恋心を抱き、彼女らに未だ何とも言えぬ怒りめいたものを持つのは、何だか自分が男好きのようで、羞恥心があります。

「ただ、それでも嬉しかったんです。わたしを庇ってくれたのは、DQNさんが初めてでしたから」

DQNさんの表情は、何か信じられないものを見るような顔に変異しました。

わたし自身、こんなセリフを言う自分が偽善的に感じられます。でも、紛れも無い真実なのです。

あの時が、どの時と比較しても一番嬉しく幸せでした。母と父が生きていて幸せだった記憶の中でも、ここまでの体の中からこみ上げてくるような幸福感はありませんでした。

「俺・・・お前にひでえ仕打ちいっぱいした」



「そんなこといいんですよもう」

>弱者くの前で人は平然と本性を見せます。

そう、皆本来はいい子たちなのです。

DQNさんも、あの美人女子や取り巻きたちも、イケメンさんも。

ただ、人間として知覚されないわたし相手だから、どこまでの残酷になれるのです。

戦争でも同じではないでしょうか。

敵国の人間がどんな目に遭おうともざまあみろと思える人々が多数派なのは、相手を本当の意味で人として見ていないから。

だから友人にはあれだけ親切で友情深いところを見せるDQNさんも、わたしには平気で醜いところを見せてくれたのです。

「わたしはDQNさんには何でもしてあげられます。本当ですよ？」

秘めていた本音をポロリとこぼしてしまいました。

引かれるかなと思いましたがDQNさんの耳にはどうやら入っていなかったようです。

DQNさんはわたしの髪をくしゃりと撫でてくれました。

DQNさんの顔に浮かんでいるのは、日本での嗜虐性溢れる笑いではありません。

懺悔と後悔、申し訳なさなど、とても優しい気持ちに占められたものでした。

「貴様！何をやっておる！」

威厳のある声に、DQNさんとわたしは振り向きませす。

王様と聖騎士様がいました。わたしの頭を撫でてくれたのはDQNさんでしたが、貴様というのは明らかにわたしのことを指していました。

「ドキユン！そんな女に触れるな！」

「御神賜様、お手が腐ります」

怒りに赤く染まった王様から飛び出たドキユンという用語に少し笑いそうになりました。可愛い響きです。

「ギャーギャーうるせえなあ。俺の勝手だろ。つーかも帰ってきたの？もう帰ってこなくてよかったのに」

「僕は死ぬまで君を離さん！」

「ゲツ……」

王様の本気の声色に、さすがのDQNさんも恐怖を覚えたようです。

「僕と一緒に部屋へ戻るのだ！」

「俺は姫さまの部屋に行くんだー！！！！」

DQNさんは王様にお姫様抱っこをされ連行されたのでした。

わたしは一人ぼつんと雑巾を持ったまま、DQNさんの後ろ姿を

見送ります。

「君とドキユンくん、らーぶらぶだったね〜」

突如、目の前に魔法使い兼弟殿下様が姿を現しました。

本当に顔面前でしたので、驚き過ぎて心臓が飛び出るかと思いましたが。

「ずっと見ていらしたのですか」

「うん、王様の命令だしね。一応ボクは仕事には真面目なんだよ？」

にっこりと笑う弟殿下様。

弟殿下が神出鬼没だとDQNさんが言っていました。もしかや弟殿下様はずっと透明な状態でDQNさんの傍にいたのでしょうか。

そして、仕事というワードからして、こうしてわたしがDQNさんと会って話した会話も全て筒抜けで王様に報告していたのでしょうか。

王様のストーカーっぷりに、寒気がしました。

「ところでさー、君たち、どうしてニホンってところから召喚されたのか、何も知らないよね？」

わたしは、弟殿下様の顔を見ます。その顔に現れている感情は、笑顔で塗りつぶされ、うまく読み取れません。

「教えてくださるのですか？」

今までこの城の者たちは、教えて下さりませんでした。  
絶世の美少年と讃えられるDQNさんの問いにさえも。

「うん。じゃないとコトが進まないもの。あのね、ドキくんは関係ないんだ。本来重要なのは女である君。  
君は王の妻として連れてこられたんだよ」

信じられない言葉でした。この醜いわたしが、美しき王の妻とは。

「異界の者を妻とすることがこの国での風習なのですか」

「そうだね。それにも理由があるんだけど、それは秘密にしておう。それとさ、君は>弱者<じゃないよ？」

その言葉に、心臓を鷲掴みにされた気がしました。

「・・・心も、読めるのですか？」

「ふふ。君が王の妻や御贈神様ではなくて、王のお気に入りであるドキくんくんと繋がりがなくとも、ここでは圧倒的な強者だ。話はそれだけ」

弟殿下様は、前触れもなく消えました。

わたしは水桶と雑巾を持ち、弟殿下の残した言葉を考えながら、その場を後にしたのでした。

## いじめっこ王様

弟殿下様から衝撃的な話を聞いて、二週間が経ちました。

わたしは王城の塔から景色を眺めていました。

王城の下には、絵に描いたような中世ヨーロッパ世界もどきの人々が無数に蠢く城下町が見えます。

ふと、「人がゴミのようだ！」が口癖だった数少ない友達を思い出しました。

何だか切ない気持ちになり、日本とは変わらない空を見上げます。

目の前に広がる世界。

誠に汚い空です。純白だったはずの雲は、子供の汚い指で弄つた如く黒灰色で濁ってます。

見ての通り、今日は良い天気ではありません。

少し残念な気持ちになりながら、空を仰ぎ見て新鮮な空気を吸います。

ああ、美味しいです。確かに生きているのだと実感できます。

城は自然を大事にしているようで、緑はありふれているのです。

自然への愛はどこの世界でも同じだというのでしょうか。

これだけ風景は異なるのに、異世界の空も緑も自然への愛着も日本と変わらないとは不思議です。

あの時、弟殿下様は認めてくださりました。

わたしたちは『異世界』に連れてこられたのだと。

今更過ぎるのですが、わたしたちはここがどこなのかさえ明確に教えてもらえなかったのです。

召喚され、混乱したDQNさんは王様に問い詰めましたが、「君と僕とは引きあう運命なのだよ」など愛の言葉ではぐらかされたま

まだだったのです。

初め、DQNさんとわたしは何かのドッキリ番組だと楽観的でした。

あまりに非現実的な出来事に、どこか愉快的な気持ちで眺め、流されるまま過ごしてきたと思います。

そろそろ、本格的にこの『現実』を直視するべきでしょう。

今までどこか夢の世界のように感じていたのも、ある種の自己防衛だったのです。

帰れないかもしれない、帰してくれないかもしれない、という想像がとてつもなく怖い。

あの世界に、故郷には戻れないなんて。

そう思っただけで、足の力が抜けそうなのです。

でも、逃げていては始まりません。

わたしは嘆息し、制服の胸ポケットから写真を取り出しました。

亡き両親の写真です。

彫刻のように整った顔を持つ母と、ヤクザのような父。

美女と野獣だな！ と散々言われたという二人は、結婚を反対する母の両親を押し切り、駆け落ちをしたそうです。

子供がどちらかに似れば天国か地獄と囁かれ、見事父親似の女の子が産まれました。

近所のおばさんからは陰口で嘲笑われ、子供にはからかわれ。

忘れられない記憶があります。あれは小学生の頃でした。わたしは容貌のことではしばしばいじめられ、夜な夜な羽毛布団の中で密かに泣いていました。ある時トイレに起きると、居間から母と父の会話が聞こえてきました。

覗いてみると、父は「俺が不細工なもんだからあいつは」と涙を流し、母に慰められていました。

正直、母に似たかったなあと思っていました。

母に似ていたのなら、見下されることもなかったのですから。

その時を境に、わたしはそんな自分にあつた気持ちを恥じ、父に瓜二つのこの顔を下に伏せず生きて行こうと思ったのでした。

「なんだそれは」

写真が、両親がパツと視界から消えました。

振り向くと、金髪碧眼のふつくしい王様がいらっしやったのです。

「これはお前の親の絵か？ ふん、醜さがよく似ている」

「返して下さい！」

わたしが写真を奪い返そうと王様の手に触れました。

王様の顔は不快感に歪みます。

「触るな、腐るだろう」

「じゃあ返して！」

必死なわたしの形相に、王様が少し引いているように見えます。

そうでしょう。今までは王様に何をされようと、うんともすんとも反応を見せなかったのですから。

そんなわたしでも、譲れないものがあるのです。

もう二度と日本の地を踏めないかもしれないのに、この写真がもし失われてしまったら。

そう考えるだけで、ゾツとしました。

王様は腕を上げました。

王様は背が高いため、少し腕を上げられると低身長わたしには手が届かなくなっています。

ジャンプをし必死に王様の手にある写真を取り返そうとしますが、絶望的な差があり、かすりもしません。

「悔しいか？ ほれいほれい！」

王様は本当に愉しげです。

そんなにわたしは憎まれているのでしょうか。

「王様はわたしの夫なのでしょう？ 奥さんに向かってなんですかその態度は！」

「は？」

写真を返して欲しくて放った言葉。

王様の顔が目に見えて凍りつきました。

そんな表情をされては、わたしも戸惑います。

「え、と、妻にそのような態度をするのは良くないと思います！」

「お前など妻でもなんでもない！ 僕の妻と自称する醜女め、恥を知れ！」

王様は写真を二つに折りました。

その奇行に悲鳴を上げざるを得ませんでした。

「何するのですか、止めてください！ それはこの世界でたった一枚の」



「ふん、知ったことではない」

王様はそう無情に言い捨てます。

この時、わたしは父に申し訳なさを感じながらも、自分の容姿を呪いました。

もし、DQNさんのように美しいとされる不細工だったのなら、王様はこのような仕打ちをしなかったでしょう。

「お願いです、返して下さい！」

必死の懇願も虚しく、王様は写真を折り紙の飛行機のように折ると、外へ飛ばしてしまったのです。

「こんなものは飛んで行ってしまえ」

王様は笑って言いました。

ひどい、ひどすぎる。

わたしの目からは、涙がぼたぼたと流れていきました。

辛い時も、両親が見守っていてくれると思い、あの写真を片手に耐えてきたのです。

それを、この美しくも残酷なる王様は飛ばしてしまったのです。

わたしは、すぐに行動を取りました。

開けられた窓から飛ばされた写真は城下町の方へ飛んで行ったのです。

今すぐにでも取りに行けば、写真は、両親は大事に至らないのかもしれないかもれません。

全速力で走り、階段を駆け下ります。

途中、目を丸くしたDQNさんに鉢合わせました。

挨拶をする間もなく、写真を目指し、わたしは外へ飛び出しているのです。

門は幸いにも他に外へ出る人がいたようで、開いていました。

外出時は許可を取らなければならないのですが、そんなことに構っていません。

門番がいましたが、わたしのきつとおぞましい顔を見て驚いたのか、呆けたまま何も行動を取りませんでした。

この時、わたしは初めてこの世界の城の外へ足を踏み入れたのです。

## いじめっ子王様（後書き）

7回ほどで終わると思います、と書きましたが7回では収まりそう  
にないです。

## DONさんの優しさ

呆けていた門番が追いかけてくる前に、わたしは人の中へ紛れようとうしました。

すると、時が止まったかのように人の口から出る騒音が、ぴたりと止まったのです。

わたしに気づいた城下町の人々は、動作を止め、吸い込まれたかのようにわたしを凝視しました。

その光景は異様の一言。どうやらわたしが原因のようです。

わたしは居心地の悪さと妙な申し訳なさに俯きました。

異世界人の見たこともない顔つきに彼らは驚いているのか、わたしの醜さに呆気に取られているのか。

おそらく後者でしょう。この反応は最初に城にいた時と同じです。現在は嫌がらせへと成り果てましたが、わたしがやることもなく城でうろうろしていると、城の者がこういった反応を取ったのです。

『今』を『現実』と認知している現在、この城下町の人々の反応にはほんの少し心が傷つきます。

しかし、傷ついて足を止めている暇はありません。

わたしは、王城の塔の窓の方角を確認しました。

写真は、王城の塔の窓から真っ直ぐ飛ばされたのです。

早く写真を取り戻して、城に　いえ、日本に帰りたいです。

幸運なことに、王都は東京のようにごちゃごちゃとはしておらず、車は勿論ですが、いかにもありそうな馬車はなく、石道はほぼ直線

に延びていました。

写真は、風が多少あっても石道の端に追いやられるのではないでしょうか。

そんな希望的観測を持ち、わたしは走りました。

疾走中、横からいきなり強い力で引き寄せられました。

「わっ」

瞠目しながらわたしの腕を握る人物を見ると、若い男性がいました。

横の路地から半分体を出し、わたしを見つめています。

「XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX」

彼は目を大きくし、謎の言葉を吐きながら何事か訴えています。

これは言語でしょうか。

そういえば、わたしやDQNさんはどうして城の人たちの言語が理解できたのでしょうか。

魔法？

もしそうならば、城から脱走をしても、誰かの手助けを借りられないように城内でのみ言語通訳が適応されるように仕組んだのでしょうか。

だから、今こうして投げつけられる言葉が理解できないのですか？

思考の嵐に飲まれる寸前、再度男にぐいっと腕を引っ張られまし

た。

男の大きく見開かれた目。

それにぞつとさせられ、わたしは辺りの人に助けを呼ぶかのように目を合わせようとしました。

周りにいたのは老人や若い女性などで、ただわたしを見つめるのみです。

今、この世界にきて初めて心の底からの恐怖を覚えました。  
異国ですら無いこの異世界で、頼る者が誰もいない。

誰にも知らされず、殺されるかも知れません。

わたしは、掴まれた右腕を回転させました。

大の男でも通常腕を回す方向とは逆に回転させられると思わず力を抜いてしまうそうです。

しかし、その男性は腕を離して下さりません。

更に腕をギリギリと見ているこちらが痛くなるほど力を込めると、男性は腕を抑えて座り込んでしまいました。

罪悪感を覚えながらも、わたしは再び走りました。

彼は一体何を伝えようとしたのでしょうか、そしてどこへ連れていくこと。

それよりも写真です。

恐怖で放心した心を取り戻すかのように両親の写真がパッと脳裏に浮かびました。

突き刺さる視線を無視しながら走っていると、何やら子供達がいらいと集まっているのが目に止まりました。

写真はこの世界にはないようですし、もしかしたら写真を拾い上げて皆で観察しているのかもしれない。

小さい子供たちは、わたしの影で暗くなった視界に気づき、振り向きます。

あとは予想できた反応で、子供たちは固まりわたしを凝視しました。

「あつた」

わたしは、歓喜の念で震えました。

まさかと思いましたが、子供たちの真ん中にいた少年がわたしの写真を持っていたのです。

「これ、わたしのなので返してもらっていいですか？」

言葉が通じないとわかりながらも声を掛け、有無も聞かず強引に少年の手から写真を奪い去りました。

しばらく走ったまま、後ろを振り向いても追いかける様子はありません。

やっと足を止め、膝に手を当て足の腱を伸ばしました。

こんなに走ったのは久しぶりです。

片手で写真を眺めます。傷もなく汚れもなく、両親は無事でした。ただ、王様に付けられてしまった折り線だけが残念です。

その後は、二つに分けていた長い前髪で顔を隠し、歩いて行きま  
した。

今日はもう疲れました。

しばらく歩いていくと、中年の男性が誰かの名を呼ぶような怒声  
を上げました。

わたしは目を合わせないようにしよう、と判断しましたが、なん  
と中年の男性はわたしの方へ走ってきたのです。

よく見れば、中年の男性は、棍棒のようなものを持っています。

「えっ」

狂ったような男性の登場に、付近にいた人々は男性が凝視するわ  
たしへ自然と注視しました。

そして、狂った男性に共鳴させられたかのように、その場にいた  
男性もわたしに飛びかかってきたのでした。

わたしは訳がわからず、再び走り出しました。

城下町の人々は、明らかな異端人物であるわたしを目にしても何  
も手を出そうとはしなかったのです。

それが、あの男性の登場で排撃すべきだという芽出しとなったの  
でしょうか。

顔面でそんな危険人物とされるなんて酷いです。

もしDQNさんなら、女神のように崇められたことでしょう。

ああ、なんとという顔面差別！

わたしは後ろを振り向きませんでした。



足の遅いわたしはすぐに捕まりそうですが、何故か男性同士が争っていた為に救われました。

安心すると共に、わたしの心は恐怖から疑問へ占められました。異端なわたしを殺すのが目的だとして、仲間同士で争う訳はどういうことでしょうか。

もしや、急遽王様が懸賞金を出したのででしょうか。  
顔面凶器女を殺せばうんぜんまんのな。

「いやだ」

俺があいつだったら自殺するとか散々言われてきたわたしですが、死にたくありません。

頭を振り、疲れた体に鞭を打ち更に足を早めようとした時、横の路地から腕を引っ張られました。

肉を通した衝撃が襲います。

わたしの体は誰かの上になりました。

体の持ち主の顔を見ると、わたしに謎の言葉を投げつけたあの若い男性でした。

ああ、この付近の路地でした。あの若い男性がいたのは。

殺される恐怖のあまり、注意力を失っていました。

自分に後悔する暇もなく、男はわたしを押し倒し、またあの謎の言葉を投げつけます。

男には熱のような、強い感情が目にももっていました。

男は、わたしの腕を掴んだままスカートをたくし上げました。

「え？」

男はまくし立てながら、わたしの下着を剥ぎとったのです。

「は？」

男はわたしを見つめ、笑いました。

男は醜い部類の人間ではありません。しかし、わたしにはとてつもなく醜悪に見えました。

喉がヒュっとなりました。

これはもしかしなくとも、もしかしてわたしを暴行しようとする。大きな声なんて出せません。

わたしを殺そうとしていたあの男たちがわたしを探しているはずですから。

だからといってこのまま、ということとは死んでも嫌です。

いえ、やっぱり死ぬのは嫌なのです。

ああ、混乱しています。

こんなことがあっていいはずがない。

けど、こんなことがあっていいはずがないことが今まで沢山起きてきたのです。

願いも希望も神には届かず、わたしは悲しいことに翻弄させられていきました。

では、これから起きるだろうことも？

「DONさん……」

自然と声が零れました。

女であることは、嫌なことなのですね。

男の指が、わたしの秘部へ伸びようとしていたその時でした。

「てめえ！」

怒号と共に、男の頬が殴られ吹っ飛びました。

その日本語が懐かしくて、信じられなくて。

神様でさえ願いを届けてくださらなかったのに。

「DONさん」

DONさんが大きい。DONさんの背は低いのに、この時とても大きく見えました。

「大丈夫か?!」

先ほど男を殴った時の憤怒の形相とは違い、わたしを案じるような顔がこちらを真っ直ぐと向いています。

わたしがこくりと頷くと、心の底からほっとしたような顔になり

ました。

「早く帰ろっぜ。立てるか？」

DQNさんが、座り込んでいるわたしに手を差し伸べました。わたしはDQNさんの手をぎゅっと握り、立ち上がりました。

DQNさんと一緒に歩いた時の視線はそれはもう凄まじかったです。

しかしDQNさんは臆することもなく、わたしの手を掴んだまま、淡々と城へ目指したのです。

開いた門の前には、王様がいました。

怒気を隠さず佇む様に、恐怖を覚えます。

「どげよ」

さすが怖いもの知らずのDQNさんです。

本気というモノなんでしょうか。

DQNさんはいつもとは異なる鋭い眼光で王様を見据えています。

王様はそれには応じず、無言でDQNさんとわたしの手を掴み、ぐいぐいと離させようと思いました。

「何すんだよ！」

「なぜお前は女如きに気を掛けるのだ！」

「男とか女とかそういうんじゃないやねえよ！ こいつは俺の仲間だ！」

DQNさんは王様を押しつけ、わたしの手を引っ張ったまま、門をくぐっていきました。

DQNさんと王様の怒気。

そこにはいつものどこか冗談めいた空気は皆無でした。

二人の間に何かあったのでしょうか。

原因はわたし？

いくらDQNさんが王様を嫌悪しようが、わたしたちが頼れるのは王様だけなのです。

帰る場所は、城しかありません。

申し訳なさが襲います。

そもそも、この世界でのDQNさんにとっての不幸の根源は全てわたしなのです。

あの時、床拭きをしていたわたしはDQNさんに手を踏まれました。

きっとその時に現れた溢れんばかりのあの光が、わたしたちを異世界へと誘ったのです。

わたしに物質的に接していたDQNさんも、わたしの一部として認識されてしまったのではないのでしょうか。

わたしはどうなつてもいいから、DQNさんだけは、わたしは密かな決心を固めました。

「あれっ、君が僕のところを訪ねるなんて珍しいね」

弟殿下様の部屋を訪ねました。身を清めた後なのか、赤毛が濡れペチャンコになっています。

濡れたことにより更に赤毛が鮮やかになり、赤に映える彼の薄水色の瞳の美しさに一瞬見惚れました。

「今日はありがとうございました」

「何がかな」

弟殿下様は相変わらず読めない微笑でわたしを見下ろします。

どこか、試すような色の目は三日月の形を描きながらも笑っていないように見えるのは気のせいなのでしょうか。

「DQNさんをわたしの元へ送ってくださいたのは弟殿下様でしょう?」

DQNさんは只ならぬわたしの様子を見て、行かせないとする王様を振り払い、わたしを探していたそうです。

そして城下町を駆け巡っている途中、いきなりわたしが暴行されんとする場所へ飛ばされたそうです。

「まあ、止めないほうがいいかなって思ったよ」

「え？」

「君、ああいう熱血的な求婚に縁がなかったようだしね」

「・・・きゆう、こん？」

違います。

未遂でしたが、あれはただの暴力でした。

眼の前の人物の意志を無視し、己の欲望を遂げさせようとする身勝手な暴力。

わたしは、己の体の底から突き抜けるような熱く激しい怒りを感じました。

しかし、そのエネルギーを悲しみが波のように覆い込めます。

悲しくて、それに怒りや彼の言葉への異を唱える気にもなれなくて。

「誘拐婚って意味だよ」

荒れ狂う大波の感情に飲まれるわたしの様子を読み取ったのか、弟殿下様はフォローするように言いました。

「誘拐婚？」

「この国の風習だね。」

純潔を失った女は、その男の元へ嫁がなければならぬ。

例え純潔を失わなくとも、一晩他の男といれば純潔を失ったと判断され、その男と結婚するケースが普通なんだ。

純潔を失ったとみなされた娘は家の恥となってしまうからね。

だからこの国の男は好みの未婚女性がいれば、親戚ぐるみで拉致して強制的に一晩を過ごし自分の妻とさせることが珍しくないんだよ」

そんな話、嘘だと思ったです  
そんな残酷な話があつていいはずがない。

わたしは平成の日本人です。だから、異世界の文化に口出しをしてはいけないでしょう。

世界には、その世界のルールがあるのです。

しかし、この世界の女性は構わないのですか？

辛くとも、周囲の圧力や暴力で、『嫌』と声を出せないのではないですか？

「犯罪にはならないのですか」

「一応は前王が他国からの非難を受けて誘拐婚を罰則化して取り締まっているけど、今の王はやる気がないからあつてないようなものなんだよ」

弟殿下様の言葉のショックで気づかなかつたのですが、あの若い男性の謎の言語は、このわたしを自分の妻にしようとしたということですか。

弟殿下様がそうはつきりとおっしゃっていたので間違いではないでしょう。

中年の男性の行動に触発され、あの時争い合っていた男たち。彼らも、わたしを嫁にしようとしていた？

あの初期の城の人々や城下町の人々の異様な凝視といい、それはつまり。

わたしの仮説が正しければ糸が繋がりますが、まさかと思いまし



た。

## 弟殿下様のはかりごと

「そう、君は美しいんだよ。規格外にね」

わたしの心を読んだらしい弟殿下様が答えて下さりました。

わたしは美しい。

ただしこの世界限定ですが。

信じられません。

いえ、信じたくありません。

全く嬉しくないです。

あんな目に遭うくらいなら、醜いアヒルのままでいたいです。

しかし、わたしが美しいというならば、何故王様はあんなにわたしに意地悪をしてきたのでしょうか。

そして、聖騎士様や城の美少年たちも。

醜い者という言葉投げかけ、憎しみの目で睨みつけてきた王様。ブス、とからかい仕事を押し付けた美少年たち。

わたしが女という性別だから？ ホ だから？

DQNさんとの仲を疑われているから？

それでもどこかしっくりときません。

「どこかしっくりしないその感性を君は信じるべきだよ」

「もつわたしの心を読まないでください、不快です」

そう言うと、弟殿下は声を上げて笑いました。

「君、色々とはっきりと言うようになったね。以前は不快なことをされても意志を口に出さなかったのに」

はつとさせられました。わたしが美しいと自覚したからどこか傲慢になってしまったのでしょうか。

またもや弟殿下様は読取ったのか、否定するように首を振りました。

「王様は君にとって大切なものを取り上げた。君はその行動に対して異を唱えざるを得なかった。

あのやり取りで君は自分の気持ちの伝え方を理解したんだよ。

例え、自分の美しさに自覚しても君は変わらないに相違ない」

「・・・そう言われると、そうなのかなと納得してしまいます」

この魔法使いは、どこまで見通すのでしょうか。

考えていることだけでなく、わたしの心の深層のことも読み取れるのでしょうか。

「違うよー。僕がなんとなく思った、ただのす・い・そ・く」

・・・頭が発狂しそうです。

弟殿下様と一緒にいたくないです。

見透かされることが、嫌で仕方ないのです。

きっとわたしはとんでもなくプライドが高いのです。

自分の弱みを他人に知られることがとてつもなく不快なのです  
か。

ふと、疑問がわきました。

「王の母親も、わたしと同じ異世界人なのですか？」

わたしと同じ世界かもしれない人。

もしご存命なら、会ってお話したいと思いました。

ひよっとしたら、王様たちの力を借りなくとも帰れる手がかりが  
見つかるかも知れないですから。

「王の母親は違うよ？ だって召喚する必要がなかったもの。

風習といっても気まぐれなものさ。必要に迫られた時だけ」

「必要とは、どういう」

そう聞き直そうとした途端、腕を引つ張られました。

この時、わたしはあの若い男性に腕を捕まれた場面が、まるで再  
現されたかのようにあの時の感覚に陥ったのです。抵抗するという

手も思い浮かばず、そのままされるがままでした。

はっと気づいたときには、弟殿下様は部屋へわたしを完全に引き入れていました。

カチャリ、という音が部屋を反響して、背筋が冷たくなります。

「何の、真似ですか」

弟殿下様は笑っています。

わたしは彼の真意がいつだってわからなくてどこか恐怖感を持っています。

「ねえ、君は王様が憎い？」

臆すわたしを弟殿下様はどこか面白そうに眺め、そうわたしに問いました。

弟殿下様の薄氷を思わせる瞳は相変わらず笑みを浮かべています。

「いいえ」

わたしが否定すると、弟殿下様は意外そうな顔をしました。

「どうして？ 君はこの世界へ拉致されてきたんだよ？ 誘拐婚と同じか」

「王様はわたしをあのように手籠めにしようとはしていません」

「ドキユンくんにはどうかな？ 手籠めとまではいかないけど、色々触られてドキユンくんかなり嫌がってるよね？」

「それは」

男性だからと軽く見ていましたが、DQNさんはかなり嫌な思いをしていたのでしょうか。

そうですね、例えどんな相手だろうが、自分の意志を無視されて体を好き勝手触れられて苦々しく思わないはずがないのです。

あんなの、人として扱ってもらえないことと等しいです。

「ドキユンくんはこう思っているはず。早く帰りたい、ってね」

「・・・何をしたいのか。ただでは、帰してくださいさらないのでしょうか？」

「君は聡いね。僕の言いたいことをすぐに察してくれる」

「わたしはドキユンさんを日本へ帰してあげたいです」

わたしがどうなっても。

誓いを読んだ弟殿下様は満足そうに笑いました、

「じゃあ直人に言うね。王を殺してくれないか」

それは、予想だになかった言葉でした。

「こ・・・・・・」

「何だいそれは」

どうやら聞き間違いではなかったようです。

「なぜ」

なぜ殺して欲しいのですか。

なぜわたしにそれを頼むのですか。

「僕は常に>制約<に縛られているんだよ。一般魔法及び上級魔法はもちろん、姿を消せる、心も読める、瞬時に移動できる・・・など魔法を超えた異能を持つんだ。>制約<は強すぎる力への抑制となり、>制約<を破れば>応報<がつく。

僕はこの城から出れないし、自らの能力で物事を変えられない。他者の人生さえも変えてしまうようなことは、他者への命令など間接的なことでもやってはいけない。

でも、異世界人である君とドキュンくん相手ならそうでもないみたいだ。

例えば、ドキュンくんを君の元まで瞬間移動させられることができた。結果、王の妻となる君の純潔を守れた。これはとてつもなく大きな意味を持つんだよ。

その要因は何か、今のところ仮説は三つ立てられる。一つは、この世界の人々に植えつけられていると推定される『軸』が異世界人には有らず、制約と認知される装置が備わっていない。

二つ目は世界調整説から。この説によると、『軸』は世界が万物に賜るものであるとされる。この世界に来たばかりの君らは未だ世界の住人だと認知されず、『軸』が形成されていない。つまり現時点においては白紙状態で、いつか『軸』が造られてしまう。

三つ目はただ異世界人ってだけで融通が多少効くだけっという曖昧なもの」

弟殿下様は、わたしの心の中の間に後者のみ答えて下さりました。そして、頭があっばなわたしはよくおっしゃっている意味がわからないのです。

「つまり、異世界人である君やドキュンくんを通してなら僕に>応

報くが付かずに王を殺せるというのが僕の仮説」

「動機としては、やはり弟殿下様は王になりたいからですか？」

あれ、でも王座についたとしても人に命令できないなら王様になる意味がないですし、怨みですか？」

「僕は王の椅子に座れるだけでいいんだよ」

彼はそうにつこりと答えました。

これは、権力欲というもののなのでしょう。

それは、自分の命を危険に晒したり、肉親を殺してまでも満たしたい欲なのですか？

「君には理解できないだろうね」

どこか自嘲気味に笑う弟殿下様。

はい、全く理解できません。

「これは賭け。君が王を殺めて僕に何もなければ僕が君たちを元の世界に戻してあげる。

そして僕が王座につく。

もし僕が応報を受けたとしても、直前に君たちを日本へ帰すよう弟子に遠隔感応して伝えるから安心しなよ。

命をかけた大博打、面白そうじゃない？」

「面白い？」

何を言っているんでしょう、この人は。

悪寒で身震いがしました。



弟殿下様の部屋から出ると、そこには王様が立っておられました。傍には、聖騎士様が不快を隠さずにふつくしい顔をお歪めになつておいでです。

よく見たら、王様の影になっているのは妹姫様。俯いた顔からは雫がキラキラと硝子のように落ちていきます。なぜ皆様がここに。

「なんとふしだらな娘なのだ！ ドキョンだけでなくっ……！」  
王様の、憎しみに煮えたぎった目。  
ぐつぐつという音まで聞こえてきそうな勢いです。

「……うっ……ひゅく……本当に……？」

何が？ と聞いてはならないでしょうか。  
妹姫様の瞳はサファイアようで、涙により透き通り輝きを更に放ちます。

その様がふつくしすぎて、意味もわからないままごめんねと謝りたくなります。

「うわあああああ……！」  
「姫さま、私は裏切りませんから」

侍女さんは妹姫様を胸に抱き、よしよしと背中を摩りとてもご満悦そうです。

こづいづのは、何でしたっけ。

百合？

弟殿下様の部屋に入ったわたし。

それは、不貞を疑われるだけの材料になったのでしょつか。

一晩を共にすれば妻にならなければいけないという困らしいです  
から。

弟殿下様………わざとですね？

嫌がらせですね？

弟殿下様のはかりこと（後書き）

部屋を出て王様達がいたのは、妹姫の侍女が偶然喪少女が部屋へ入るところを目撃し皆に報告をした為です。

## 喪子狩り

いつもの場所で、ゴミを集めちりとりで取っていた時でした。

「あのことはなさらずにいてください」

開口一番にそう言ったのは、灰色の髪、黄土色の目と薄い配色のぼんやりとした美少年でした。どこかでわたしは彼を見ましたが、思い出せません。この子はとてもお綺麗なのですが地味で目立たない、記憶に残してもらえないタイプなのでしょう。

「君は」

「ご存じなかったでしょうが、私は王弟殿下の弟子であるのです。是非、お願いを申し上げたく………あああああ苛々する！！俺は女が大嫌いなんだ！！！」

「そうですか」

「特に美しい女はな！」

大人しそうな美少年ですが、口を開けるととても攻撃的なようです。人は見かけで中身は掴めないのだとしみじみ納得できます。

「そんな俺が頭を下げて敬語を使って頼みごとをしてんだ、言うこと聞けよな」

「ところであのことは、何のことをおっしゃってるのですか」「そこからか。とことん察しの悪い愚鈍な女だな。とにかく女は死ぬ。総じて脳に蛆が湧いて死んでしまえ。特にお前、御神賜様であるから俺に殺されずに済むことを神に感謝しろ。」

ああもつ、なんでこんな醜い女と面を合わせなければならんだ。

さつさと本題に入る。馬鹿は馬鹿なりに理解しようとする努力を聞け、低能女。お前が決してしていけないのは、殿下の御命を賭けての大博打に乗ることだ」

「何故そのことをご存知なのですか？」

あの時、弟殿下様はお弟子さんに応報を受ける直前にわたしたちを帰還させるようお伝えするとおっしゃっていました。彼が応報を受ける直前にと言ったのは、他者の人生さえも変えてしまう行動は、他者への命令など間接的なことでも禁じられているからです。その他者がわたしたち異世界人であり、現時点では応報がつかないと考えられても、この世界の住人であるお弟子さんに直接命令することは憚れたのでしよう。

「遠隔感応で部屋の中の会話を聞いていたんだよ。万が一だが、殿下が淫魔に誑し込まれるかもしれない危険性があつたからな」

「淫魔って……わたしのことですか？」

「どうでもいいことばかり突っ込むな！ 本題に入らせるよ！」

「その件ですが、ご安心してください。わたしは人の命を奪つてまで事を成し遂げたいなんて考えてません」

DQNさんが望むことは何でもしてあげたいのですが。

「人を殺してまでなんて、思わない」

そんな考えは元からありません。

弟殿下様に渡され、こつそり足の付根に装備した短剣。これで一刺しすれば、全ての血肉ある生き物は蛋白質と水とに分解され、死に至らしめることができるそうです。ああ、なんて恐ろしい武器なんでしょう。戦時を生き抜いた訳でもない平和ボケした平成のゆと

りっ子のわたしにはそんな度胸、端から無いのです。

その覚悟と真正面から向きあうことになるのは、後のお話ですが。

弟殿下様のお弟子さんはわたしを疑いながらも一応は納得してくれて、嫌味と罵倒を言い残し去っていきました。

「大丈夫？」

先ほどの地味綺麗系の美少年ではなく、華やか可愛い系の美少年がわたしに声を掛けました。覚えのある彼を認識し、想起されました。殿下の弟子だと名乗ったあの男の子は、この目の前の美少年と一緒にわたしに雑巾を投げつけたりバケツを蹴りあげたりゴミを撒き散らかした下働きの子らでした。

そんな彼らの仲間のこの美少年は、何故かわたしを案じるかのような目の光を見せています。

「あいつに何もされてない？」

「特には」

「そう。あなたにさ、一応謝罪しておきたいんだけど。僕、本当は僕らの代わりに掃除してくれてるあなたにあんな嫌がらせしたくない。けど、あいつらがあなたを気に入らないっていうから一緒になつて色々酷いことした。悪かった。別に許さなくてもいい」

この美少年は、わたしに謝罪をしています。目を瞑り、わたしからの言葉を待っています。

「許します」

「え」

そんなになわたしの言葉に怯える様を見せられていると、こちらが申し訳なくります。

「もう気にしないで下さい」

「……ありがとう。それと本当はこれを伝えに来ただけ、あんた今すぐ逃げた方がいい」

美少年は緊張を走らせ言いました。

「さつき、城の者が皆呼び出されて、王の御命令が下された。『王妃として召喚された御神賜様は男を誑かす異世界の淫魔。見つけ次第、処刑すべし』とさ。」

あいつと接触しててたのを見た時はあんた殺されるのかと思っただ。特にあんたを憎んでたあいつが招集でいなくて命令を聞いていなかったのは不幸中の幸いな。

あいつ、殿下の弟子だし様々な魔法を使えてとにかくキケンなんだ」

「わたしは、逃げたほうがよろしいという訳ですか？」

何やら大変な事態になっている。現実感が沸かないながらも、不安と恐怖がぞくぞくと上がってきました。

「門は見張られているし、闇雲に逃げるよりも身を隠した方がいい。もし見つかったら、あんたは処刑前の罰と称して死んだほうがましと思わされるような仕打ちを受けるかもしれない。僕、そんなあんた見たくない」

「どこに身を隠せば」

「僕がいい場所知ってる」

そういい、美少年はわたしの手を引き導いてくれました。わたしは不安に襲われ、隠れ場に行く前に見つかってしまわないかと聞きました。美少年曰く、彼が招集での王様の長い話が終わらない内に抜け出したために、まだわたしの搜索は始まってはいないだろうということだそうです。

ゴホッ、ゴホゴホッ、と激しい咳が続く。DQNは息苦しさで胸の締め付けられるような痛みで喘いでいた。

「御神賜様・・・やはり医者を」

傍で控えるのは、聖騎士。王は仕事で今はいない。王が帰ってきたら余計に悪化しそうだ、とDQNは苦々しく思う。あれから険悪なムードだ。訳の分からぬことを言って一人でキレ癩癪を起こすあの王とはもう付き合いきれない。

「ただの風邪引いただけ。医者なんていらね」

「ですが」

「いらねえつつってんだろ！」



DQNが怒鳴る。聖騎士は、青ざめ、下を向く。その様子を見て、DQNは小さく謝罪した。

「お前が俺を心配してくれているのはわかってる。本当にお前はい奴だよな。なんであんな変態王のところで働いてんの」

「私は、本音が口からただ漏れになってしまっただけです。それも、マインスなことばかり。私の悪癖をご存知である故に、王は私を傍らに置かれたのだと思います。私は負の感情を隠せないで、ある意味信用できるのでしよう」

「ふうん。いつそプラスがただ漏れだったらよかったのにな」

「本当に、そう思います。負とは逆の感情を伝えることは、酷く不得意なのです。それすらも王は見越しているのではないかと私は」

聖騎士は甘く切ない目でDQNを見つめる。

「それなら態度で表せばいいんじゃないの？」

「態度、度？」

もしかそれは自分を誘っているのか、と聖騎士はわなわなと震える。都合のいい妄想だとは百も承知だが、この図々しい夢も捨て切れない。

現在彼はあの魔女の意中に嵌っているのだ。魔女を断ち切り、彼を正常にすればもしかしたら、と聖騎士は儚い期待を持っている。

「昨日、王様がやっごと決断なされたのですが」

「あのうんこ王がなんだ？」

王様、という言葉が耳に入り途端にDQNの顔が虫を噛んだような顔になる。

「男を誑かすあの魔女を滅します」

「は？」

「あんな女、王妃にふさわしくありません。ましてや、あなた様にも」

「なんの話だ？ 王妃って、おい、ん？ 魔女って誰のことだよ？」

「お前に付属してやって来たあの醜女のことだ」

ドアが開く。DQNに与えられた部屋には内側からかけられる鍵がついていたが、城の主である王には関係がなかった。

「お前はもうよい。あとは僕がドキユンを守っている」

「しかし、王」

「黙れ。お前は皆と共に、あの女を探し出し、処刑しろ」

「………畏まりました」

聖騎士は一礼をし、部屋から出ていった。

「処刑って何だよ？！ おい、あいつに何かしたのか？！」

「ドキユン、もう心配しなくていい。あの魔女を処すれば、お前も目を覚ますだろう」

「意味わかんねえよ！ あいつが何をしたってんだ！！」

その言葉に返すこともなく、王はDQNを抱きしめた。骨がみしみしと鳴り、肺が圧迫され、DQNの顔が真っ赤になる。照れている訳では断じて無いのだが、案の定王は勘違いをし、DQNを可愛らしく思った。

「がががが……く、苦し……は、はなせ。俺はあいつを助けに」

「ドキュンはここで僕と一緒にいるんだ。全てが終わるまで」

DQNは気を失った。王は、DQNの頬を撫で、唇とそれを重ねた。

「こつちだよ」

嫌な予感はしていたのです。美少年はわたしと目を合わそうとはしてませんでした。それは、何か後ろめたさを持っていたのだろうと推測していましたが、美少年の謝罪と誠実さを、わたしは信じたかったのです。

こんなことがあっていいはずがないことが今まで沢山起きた。それでも、期待せずにはいられなかった。

連れてこられた階段の横にある隠し扉。そこには、あの意地悪をしてきた下働きの美少年たちがにやにやとわたしを待ち構えていたのです。

## 美少年のしつと

ぐったりと体を王に預ける狐顔の少年を、若き王は愛しげに頼ずりした。

もうじきだ。存在だけで王の古傷を抉り、少年の心を惑わした忌まわしき女は報いを受け、少年は王のものとなる。

人の恋路を邪魔する邪な者はケツから口へ杭で打たれて死んでしまえ。その名言を遺した詩人の名は何だっただろうか。

あの女さえ消えれば、王と少年の愛を妨げる者はいなくなるのだ。聖騎士はDQNに懸想しているようだが、とても忠実で理性のある男であるから心配はないだろう。

そして、魔法使いでもあり異母弟であるあの男。DQNに興味のあるような素振りを見せ、何度かDQNの体を無遠慮に触れていたが、所詮哀れの身である。王は寛容な心で許してやろうと思った。例え身の程知らずの思いを抱いていたとしても、奴は他者はおろか自分の運命さえも変えられない。

王は、DQNとの出会いを思い起こす。召喚陣の上で、無防備に肢体を投げ出していた少年。打算のない無垢な姿に、一目で囚われた。これは偶然的な巡り合わせではなく、必然そのものだ。王は考える。

早くその瞳を見せておくれ、と王は語りかけるように召喚陣の方へ駆け寄ろうとした。

しかし。あの女がいち早く少年を抱き抱えその頬をぺちぺちと叩いた。運命の出会いの瞬間を邪魔された王の憤怒は、今でも夢に見るほどに刻みつけられた。

「王妃となるのはお前だったのだ」

事が済んだらドキュンを王妃にしよう。こんなにも美しいお前なら性別など関係なくあの愚民どもに祝福されるだろう、と王は高笑いを上げた。

隠し部屋へ引き入れられ、扉は閉ざされました。

蠟燭の僅かな光の中で、二人の美少年たちの白い顔が照らされています。この大柄の美少年と、眼鏡を掛けた知的そうな美少年は、わたしに仕事を押し付け嫌がらせをしてきた者たちでした。

「破滅的なバカの癖にやるじゃねえか」

「本当に連れて来られるとは思ってなかった。よっぼどこの淫魔がバカだったってこと？」

否定はできません。事実、わたしの成績は下から数えた方が早いのです。

わたしをここへ連れて来た華やか美少年の手に力が入りました。

「ごめんね」

彼のぽつりと放たれた声が鼓膜に音響します。わたしが何か言おうとして口を開くと、「でも、騙されないで逃げてほしかったよ」

と、彼は半ば怒りを込めて言いました。

他の美少年達は笑い声を上げます。わたしも、笑いたいような泣きたいような気分になりました。

「お前、その女に恋焦がれているんだろ？」

大柄の美少年が華やか美少年を引つ張り上げました。

「違う。僕は」

「いつそその淫魔と一緒に愛の逃避行をしてくれれば面白かったのに」

「・・・っ・・・そんなことできないって、わかってるでしょ？」

「まあな。俺らに何されるか、怖いんだろ？」

「・・・それだけじゃあ、ないよ・・・」

頬を染め、大柄美少年から目を逸らす華やか美少年。

「この淫魔は王弟殿下の部屋に入ったらしいな。王弟殿下を惑わそうとするとはなんとふしだらな！」

割り込むように声を張り上げた眼鏡の美少年です。おそらく眼鏡の美少年は流れを変えたかったのでしょう。わたしにとっても耐え難い雰囲気を感じられたので、彼がわたしを侮辱しているとわかっていてもその発言に救われた気がします。

そもそも、淫魔という言葉自体がちょっと。わたしには縁が遠すぎる用語であるために褒め言葉に思えてしまいます。セクシーと同義的な感じで。

「そうだな、この淫魔をやっつけなきゃな！」

「えっ……」

「何だ、文句あるのか」

「……」

「あーなんかお前があの子を庇ってんの見たらムカついてきた。存分に痛めつけて息の根を止めてやるぜ」

「僕は別に彼女を好きとかじゃなくて、ただ、お掃除を代わりにやってくれてたから……」

「そう擁護してんのが好きってことじゃねーの？ なあ？」

これはshit！ というものですか。きつとBL界のお約束な  
のですね。

ああ、わたし本当にそういうの興味ないんですけどば。

よし、彼らがこの痴話喧嘩に気を取られている隙にこっそり逃げ  
・るまでもなく、ドアを開けたことにより光が入り彼らの注意を  
引いてしまいましたが、全て想定内です。

引き戻される前に、わたしは部屋の外に向い叫びました。

助けてください、と。

それが沢山の人々を呼び、より酷い事態になってしまつことも容  
易に想像できました。

けど、DQNさんか弟殿下様が助けしてくれるのではないかとー  
ー期待を抱いてしまったのです。

その結果、SOSは思わぬ人物に届きました。

「やめてあげてー！」

妹姫様です。彼女は、ここに押し寄せようとする城の使用人たちを物凄い勢いで押しつけ、呆気に取られる美少年たちを尻目に、わたしを庇い立てるように前に立ちふさがったのです。

「うるせえブス、あっち行ってる！」

「おい、姫様にそんな口を叩くな。姫様、王の命令です。この淫魔を退治しなければ」

「いや！」

妹姫様は、涙を流しわたしを庇おうとしてくれています。ああ、DQNさんの想い人だと思って少し距離を取っていてごめんなさい。

「姫様！」

蒼白な顔で駆け寄ってくるのは、妹姫様の侍女です。

「そんな女……庇わないで下さい！ お優しい姫様なので、心をお痛めになるのはご理解できますが、その女は人の心を弄ぶ淫魔ですよ！」

「例え淫魔だとしても……全く女の子のいないこのお城に彼女が来てくれて、本当に嬉しかったの……！」

そもそも淫魔じゃないのですが……。

「何をあなた達はふざけておいでなのですか」

見物していた使用人たちを剣で脅すように散らさせたのは、聖騎士様。



そして、彼がまっすぐに見据えているのはわたし。

「下卑たことを企んでいたのではないでしょうね？ そんなことをしても取り込まれるだけだというのに。さっさと殺します」

聖騎士様は、剣を振り上げました。

短い人生でしたが、色々なことが走馬灯のようによぎり・・・ませんでした。

ただ、DQNさんのことが、思い浮かび、彼の行く末が気にかかりました。

## DQNさんの血

「はっ」

DQNは目を覚ました。顔面には、王の愛に満ちた眼差しがあった。どんとんと近づいていくそれに、DQNは悲鳴を上げ王の腕から逃れた。

「照れることなかれ」

「そっという問題じゃねえよっ」

DQNは王から距離を取り、突進をした。

「ドキュン、お前から胸へ飛び込んでくれるとは」

DQNの細く小さな体が胸に飛び込んできた喜びに感涙しかける王だが、そのまま壁へ押し付けられ、首元を強く圧力を掛けられてしまった。王の力が抜けた瞬間に、DQNは王の腰元にある剣を奪いドアへ走ろうとする。しかし王に足を引っ張られてしまった。

「いい加減、恥ずかしながら素直に……ぐっ」

冷たい感触が王の首元を走る。DQNは剣を王の首元に当てていた。

「ドキュン、君が王からの寵愛を受けているからといってこの無礼はいくら何でも許されん」

「この刃で首を貫かれなくなったら、大人してる」

刃が首をわずかだがちくりと刺し、王の顔色が真っ青になる。DQNが部屋を出ていく音を、王は放心状態で聞いていた。

「聖騎士、やめろ！！！！！」

幻聴だと思いました。まさか、本当に助けに来てくれるなんて。聖騎士様は手を止め、突如現れたDQNさんの姿を目を見開いて驚きました。

「なぜあなたがここに」

「そんなことどうでもいいじゃねえか」

またDQNさんを弟殿下様が飛ばして下さったのでしょうか？

「こいつを殺すっていうなら、その前に俺が相手になる」

DQNさんの言葉に、クラリとしました。助けを呼んでおいて何ですが、何故そのようなことを言い出すのでしょうか。

「DQNさん、何を言っているのですか！」

「本気でおっしゃっていますか？」

聖騎士様が、今までDQNさんには向けたことのなかった冷たい

目で、DQNさんを見据えます。

「お前は立場上俺を殺せない。俺もお前を殺したくない。だから、どちらかが降参または戦闘不能となった時点で負けとしよう。お前が負けたらこいつの処刑はなしな。俺が負けたらもう何も言えねえ」  
「よろしいですが、私に勝てるとお思いなのですか？」

「戦っている間はこのいつに誰からも触れさせるな。俺は……  
ゴホッゴホゴホッ！！！」

急にDQNさんが咳き込み、身を屈めました。咳を抑えるように口に当てていた手からは、薄暗い部屋でもわかるほどに禍々しい赤が溢れていました。

「DQNさんっ……それは……？」

風邪、というレベルではないでしょう。吐血したのです。吐血といえ、生命に関わる病だと言われていますが。

「大丈夫だ」

DQNさんは駆け寄りわたしを血のついた手で制し、軽く笑いました。

なぜ、なぜ。

DQNさんの体が心配で、胸が潰れそうです。

「御神賜様……私は手加減をしません」

先ほどのDQNさんの吐血で顔を強張らせていた聖騎士様ですが、また冷徹な表情に戻り、剣をDQNさんに向けました。それに応えるように、DQNさんが聖騎士様に剣を振るいます。それが始りの

合図でした。

わたしたちは部屋から出て、開かれたドアから戦いをじっと見守っていました。

金属のぶつかり合う音が、この狭く薄暗い部屋に反響します。間違いない聖騎士様は手加減をしてくださっているでしょう。でなければ、勝負は一瞬で終わるはずでしょうから。DQNさんをわずかも傷つけることを、王様も聖騎士様も望んでいないのです。だからこそ、DQNさんの剣を弾き戦闘不能にしようとしている。

DQNさんは踏ん張ります。彼は野球部のエースだったのです。朝も夜もみっちりと体を鍛え、運動してきたのです。ただじゃ負けません。

汗をにじませ拳を握っていると、後ろから引っ張られました。わたしは現在自分が処刑命令を出されていることをすっかり失念していたのです。

使用人であろう美少年が、首をぎりぎりと締めてきましたが、妹様が美少年を突き飛ばして下さいました。

「どうしたっ！」

DQNさんが振り返った瞬間、DQNさんの剣がカキーンと飛ばされました。

「もう観念してください」

「おいっ、卑怯だぞ今のは！」

「戦いに卑怯という概念はありません」

聖騎士様が、再び剣をわたしに向けました。DQNさんに庇われ、あんなに一生懸命になってもらえて幸せだった。そう思った瞬間、聖騎士様の顔に何かが飛び散りました。

その飛ばされた何かは、聖騎士様の目に入ったようで、聖騎士様は隙を見せました。DQNさんは飛ばされた剣を取りに行き、聖騎士様の首元に当てました。

「戦いに卑怯も糞もないんだよな？」

「くっ……」

聖騎士様は剣を手放しました。聖騎士様の目に飛ばされたものは、血でした。そういえば血といえは。

「DQNさんっ、怪我はありませんか、先ほどの吐血は……？」  
「吐血じゃねえ。事前に軽く切って仕込んでいたフェイクだよ。病弱に見せかければ油断するだろ？」

そう言い、見せてくれた二の腕からは血がだらだらと流れていました。この血を眼つぶしに使ったのでしょうか。無茶しすぎです。

「早く手当しないと……！」

「私が治します」

そう言いDQNさんの腕の傷を治してくれたのは、あの地味綺麗系な弟殿下様の弟子でした。

「お前、誰だ？」

「とりあえず、姫様の部屋に御神賜様方を転送しても良いですか？」

「え、ええ……」

DQNさんの問には無視し、お弟子さんは妹姫様に了承を得ました。いきなりの展開に戸惑います。

「おいつてめえいきなり現れて何勝手なことやってんだよ！ 王様の命令はどうなるんだ！」

今まで静観していた大柄美少年が怒ります。

「聖騎士が負けた。よって、処刑は無くなったのだろうか？」

「あくまで聖騎士が殺さないという意味だろ、俺らには関係ない」

「おい、なんだよそれ！」

「お前も殿下が誑し込まれて悔しいんだろ？ 何良い子ぶってやがる！」

「俺は殿下の望んでいることを実行するだけだ」

お弟子さんは、そうどこか諦めたように放つ言葉と同時に、わたしを睨みました。どこか恨みがましい目に見えます。そして、怒鳴る大柄美少年を放置し、呪文を唱え、わたしたちを妹姫様の部屋へ転送してくれました。

「鍵穴の形を少々変異させます。これで王様も強硬手段を取らない限り、入れないでしょう」

「つーかお前誰だよ？」

「彼は弟殿下様のお弟子さんです。ここまでありがとございまして」

お弟子さんの他己紹介をし頭を下げると、お弟子さんは顔を歪ま

せました。

「てめえの為じゃねえぞ糞アマ」

「おい、その口の聞き方はなんだよガキの癖に……」  
「ほっほっ！  
！」

「DQNさん、大丈夫ですか?!」

「ああ、最近風邪引いたんだよ……」

「お礼が遅れましたが、DQNさんも、わたしのためにありがとうございます  
ございました」

「別にいいって」

「お弟子くん、ありがとう！ お礼にティーとお菓子振舞ってあげる!  
！」

「いいりません。では」

お弟子さんは、姿を消しました。

これからのことは頭に思い浮かばず、ドアを叩く音や王様の強行  
突破に怯え、わたしたちは眠ったのでした。

DQNはトイレにいた。トイレの水は赤く染まり、咳と共に血は  
流れる。

「これヤバくねえ？ はは。くそっ、俺どうなっちまうんだろ。もし俺が死ぬとかなったらいつ……あの状況じゃやっていけねえ  
だろ」

「ドキュンくんどうしたの?」



その声に面を上げると、王弟殿下がいた。  
なぜここにいる、という問は無意味だ。彼はいつもDQNの不意を  
ついて現れる。

「悪いが医者を呼んでくれねえ？ あいつらにはバレないように」

「王様や聖騎士にいえばいいじゃない」

「わかってんだろお前、今は敵だ。それに、奴らの情を利用するよ  
うなことは気が進まねえ」

「僕にはいいの？」

「お前は敵か味方かわかんねえが、俺のことを好きでもなさそうだ  
な」

「へえ、聖騎士の気持ちは見透かしているんだ。小悪魔だねえ」

「うるせえ」

ふふ、と王弟殿下は晒った。DQNは、この笑顔が相変わらず気  
に食わないと思った。王弟殿下がイケメンだからではない。本意が  
読めない笑いだからだ。

「まあ、医者と呼ぶまでもないよ。この世界では、君の病気を治せ  
ない。その病原菌はこの世界発祥のものじゃないから」

「お前・・・医者じゃないのにわかんのかよ？」

DQNが訝しげに王弟殿下を見る。

「だって、君を病気に至らしめたの僕だもの」

「はあ？」

「元々感染し潜伏していた菌の活動を抑えていた免疫を壊し、菌を  
増幅させ、発症させた。ちよつと菌増やしすぎちゃったのか、思い  
の外短期間で病が進行したね」

本日の天候の話をするかのように、王弟殿下はのたまった。どこか小馬鹿にしている様だったので、DQNは「悪いけど、成績オール1の俺にもわかるように言ってくんねーかな」と挑発するように言った。

「オール1とはどういう意味？ 君達の世界背景の知識はないから、よくわからないな。」

あ、そうそう。未知なる病原菌がこの世界で感染拡大しないように体内から外へ菌が出た途端、瞬間浄化されるようにしたから安心して咳き込んでいいんだよ？

「何が、安心して咳き込めばいい」だ！ てめえ何を企んでやがる！」

ドキオンが王弟殿下の胸ぐらを掴んだ。身長差から子供が大人に反抗しているようで、DQNは余計に苛立ちを募らせる。

「ドキオンくんは乱暴だなあ。考えるよりも目先の感情を率先させるのはいけないな。」

よく考えなよ、君の怒りを向けるべき相手は間違ってるよ。

全ての根源は彼女だ。君ももう気づいているんでしょ？ 君は王妃召喚、つまり彼女に巻き込まれてここへ来てしまった。そして、今は生命の危機となっている」

DQNは王弟殿下を殴った。しかし、体力が限界に近かったDQNの鉄拳はあまりに弱々しく軽かった。DQNはその反動のまま倒れ這い蹲り、王弟殿下を睨み上げた。

「そんな怖い顔を向けなくてくれないかな？ 綺麗な顔が台無し。」

さっきも言ったように、僕じゃなくて彼女を恨みなよ。全ての根源は彼女なんだからさ」

嘲笑を残し、王弟殿下は去っていった。

## 呪われし諸刃の剣

濁った意識の中、わたしは目覚めました。一時でも現実から逃避する為に眠ったようなものなのに、大きな疲労感がありました。それも、現実では何も起こっていないただの夢のせい。

夢の中、昨日の出来事が再現されたように、何者かに命を脅かされ、剣を向けられてました。そんなことよりも、わたしは目の前の相手に何か伝えたかった。それなのに、声が出ない。伝わらないことがもどかしくて、虚無が身を染みこんで。怯えや焦燥よりも、虚しさを伴う悲しみが痛かったです。

「やっと起きたか」

夢の余韻の中に飛び込んだその声はしゃがれていました。DQNさんの声のようですが、姿は今の状態では見えません。

目を見開いても闇、闇、闇。お弟子さんが王様たちからの侵入を防ぐ為に、妹姫様の部屋の窓を全て封じたからです。暖かな日の光が差し込むことはなく闇に溶けた空間に、わたしたちはいました。

「DQNさん、声が」

「風邪が悪化してんだよ」

申し訳なくあります。わたしが王様に極刑を命じられました。そして、DQNさんまで巻き込んでしまった。わたしのせいで、王様や聖騎士様との関係が悪くなってしまった。本来ならば、王様の豪華な部屋でDQNさんは療養できたはずなのに。

「妹姫様にお医者さんを手配してくれるように頼みましょう?」

「無駄だからいいよ」

「いえ、万が一のためにも見てもらった方がいいと思います。ただの風邪だと思っていいたら病気だっこともあったとテレビで言っていて」

「んなことどうでもいいだろ!」

その怒気に凍りつきました。DQNさんが、怒鳴った。

「弟殿下の弟子ってお前の知り合いみたいだな。俺らを日本へ帰してくれと頼めないか?」

「頼めることはできませんが、引き受けてくれるかは・・・」

「引き受けさせる。何でもするからとあいつに頼んでこいよ」

DQNさんの声からは、苛々が滲んでいます。体調が悪く、機嫌が優れないのでしょうか。いえ、ただのわたしに対しての苛々なのかもしれません。

「・・・・・・・・」

「ああ?」

不機嫌そうな、DQNさんの声。

「巻き込んでしまって、ごめんなさい」

しばらく、沈黙が続き、DQNさんの長い溜息がわたしの耳を通り過ぎました。

「まあ、俺はこの世界に来てよかったかもしんねえ」

わたしの召喚に巻き込んでしまったってごめんなさい。

DQNさんの言葉は、わたしの主語なき謝罪が、王様や聖騎士様との仲違いのことではなく、この世界へ連れて行ってしまったことだと理解した上での応答のようでした。

もしかしてDQNさんは、この世界になぜわたしたちが誘われてしまったのか、その理由をご存知なのですか。

再びDQNさんのため息。それは、わたしを責めているようでした。

「顔がいろいろってことでチャホヤされても虚しいだけだ。それだけは理解できた」

わたしはその言葉に否定しようとして口を開きました。しかし、DQNさんは自分の隙を見せてしまったことを後悔したのか、騒々しく立ち上がりトイレへ行ってしまったようでした。

わたしは、DQNさんを身の程知らずにも憐れみました。

顔がいいから王様を始めとした彼らがDQNさんを好きになった。そんなことは決まっています。

DQNさんは、自分の魅力に気づいていないのです。

わたしの鼻屑目を引いても、DQNさんは魅力ある男性です。だ

からこそ、イケメンで学年トップの成績のハイスペックなツレができたんです。DQNさんは頭の回転が速いというか、頭はいいんです。といっても勉強では全く発揮されていませんが。

自分への内面を軽んじないください。確かに王様がDQNさんに惹かれたきっかけは外側でしょうが、きっと内面がなければ決定打にはならないのです。

そんなわたしは頭も容姿もハッピーセットですが、DQNさんは……。

暗闇で、ぼおとしたランプの光が灯りました。

「おはよお」

妹姫様です。眠たげなお顔立ちも、とっってもお綺麗です。

「怒鳴り声にびっくりして起きちゃった。どしたの？」

「いえ……」

「今は朝かなあ？」

「どうなんでしょう……」

わたしのせいで外へ出れない。窓さえも開けられない。

「あのね、これからのことなんだけど」

「はい。妹姫様に迷惑をこのままかけ続けているわけにはいきません。元の世界に帰ろうと思っっています。その手立てを、教えて下さりませんか」

わたしへの好意を示してくれた妹姫様に責められることが怖くて、言葉を遮るように言いました。

「えー？ ずっとここにいてくれていいのにい」

妹姫様の言葉に、呆気にとられました。ふつくしいお姿を真向から見ると、想像していた責めるような雰囲気は皆無でした。

「王様は妹姫様がわたしを匿っていることをご存知なのでしょう？」

その、王様に妹姫様が怒られたり」

「だいじょうぶよお。お兄ちゃんはおたしを怒ったりしないよ！それよりも、その隠し持つてる剣のことだけど」

ギクリ、としました。

「見たのですか？」

「あ、着替えてるところを覗いていたわけじゃないのよう？ ただ、あなたが綺麗だからついつい見ちゃって……。うふふ。その剣、王弟殿下から貰ったのよねえ？ あたしにとっては兄だけどお」

はいそうですと言うと弟殿下様に都合が悪かったりするのでしょうか。言い淀んでいると、イエスと受け取られそうです。

「その剣は、外来神の眷属のもの」

普段の甘ったるさは削ぎ落とされた声。妹姫様のふつくしいお顔



が、真剣味溢れてます。

「ガイライシン？ ケンゾク？ なんかファンタジーっぽい用語が出てきましたか。」

「相手だけでなく、使手にも破壊が及ぶ呪われし諸刃の剣。呪いは使手との約束、それは等価交換であり、強力な力を産む。使っては駄目。あなた自身が体や心を壊してしまう。」

ランプの蝋燭が溶け切っていないというのに、火が消えました。突如覆った暗闇は、わたしの醜い猜疑心を表しているようで。

弟殿下様は、わたしを騙そうとされていたのですか。

## 邪神の眷属なんだぜ

妹姫様の御手が、そつとわたしの両手に添えられました。慈愛に溢れ、どこか憐れんでいるような眼でこちらを見つめます。

「王弟殿下を信用してはダメよ。彼と関係の深いお弟子くんもね」

放たれた言葉は、暖かさを感じる瞳とは違い、冷たく、切り捨てるものでした。

「なぜです、弟殿下様もお弟子さんもわたしを助けて下さりました」  
「その剣が物証よ。呪われし剣を渡したのも、あなたを処刑しようとする王を殺めることを期待してでしょう。そして、あなたを亡き者にしようとした」

「この剣が、呪いの剣とは限らないではないですか」

弟殿下様がわたしを使い捨てカイロのように利用しようとした。そんなの、嘘です。きつと、妹姫様は何か勘違いをしているのです。

「呪われし剣だけじゃないわ。何よりも、彼らは私達とは違う。邪な力を持った者たちだもの」

邪な、とは。

「魔法の、ということですか」

「表面上は魔法使いと私達は呼び重宝しているけど、管理を万全に注意を払っているわ。彼らの正体、その本性は」

「妹姫様」

「あらお弟子くん！」

突如お弟子さんが現れ、妹姫様のシリアスモードも一変、ふわふわ乙女モードに様変わりしました。  
あんまりにも見事な変身だったので、弟殿下様へのわずかな不信も吹っ飛んでしまいました。

「弟殿下様の元にいたのですか」

わたしが聞くと、彼は態度を豹変させ、耳元で「どこでもいだるクソアマ」と罵りました。

「暗くて不便でしょう。ランプのわずかばかりの光では心許ないでしょうから、光をお届けに参りました」

そう言うと同時に、部屋は太陽が差し込んだかのように明るくなりました。

「まあ！」

「すごい、ですね・・・」

今まで魔法というより超能力のようなものばかり見せられていたので、感動しました。

これはどういう仕組みなのでしょう。突っ込んだら負けでしょうか。

「あの、お弟子さん」

「あ？」

「少し、お話があるのですが」

断られるだろう、と思っただけでしたが彼は以外にもあっさりとして承し、妹姫様が引き止める間もなくここではない場所へ連れて行ってくれました。

「どこですか、ここは」

「この国で一番高い山だよ。わざわざ話があると言うなんて、殿下の大博打の件とか人に聞かれたくない話なんだろう？ 無駄口を叩くな」

「先ほどの部屋を明るくした魔法は、どういう仕組みなのですか？」  
「だからなあ、・・・日光を完全透過させてんだよ。朝昼しか使えねえ」

何だかんだ答えてくださるお弟子さんは良い子だと思います。

「あの、王様に逆らって大丈夫なのですか」

「ふん、俺は世界一の魔法使いの一番弟子だ。あんな役立たずのゴミみたいな王怖くねーよ」

本当に弟殿下様を慕っておいでなのですね。何だか微笑ましいです。

「わたしたちを、お弟子さんのお力で元の世界へ戻して頂けないでしょうか」

「無理だ。俺一人の力ではどうにもならん。異世界人召喚には、質

的に良くその上莫大な量のエネルギーが必要なんだ。お前らの召喚の場でも王宮専属魔法使い10人はいたし、全員の1年分のエネルギーを使った。そのおかげで他の王宮専属魔法使いが多忙となり暇を取らず、王はあの部屋へ入れない。運がよかったな。

だが素晴らしき殿下にとってはお前らを帰すことなど他愛のないことだ。片手間で帰せるだろう」

では、応報を受けた弟殿下様が、直前にお弟子さんに頼んで元の世界へわたしたちを帰らせることは不可能ではないのですか？

埋まっていた不信感が再び芽を見せます。王様を殺めようなど全く考えてはいないのですが、弟殿下様がわたしを利用した、ということはあまり信じたくないことなのです。

「ところで、連れてきて帰還させることは前例にあったのですか」

「<御神賜様>から王妃となった女性が『実家に帰らせて頂きます』と言い残し、二度と戻らなかったことがあったそうだ。元々彼女は莫大な力の持ち主で人の手を借りる必要がなかったというが」

なんだか、見覚えがあるようなセリフ。どこでも共通なんでしょうかね。

「これからどうするかな、だからといって王を殺めようとは思わないよ。あのクソオンナが言っていたが、魔法使いはただでさえ不信感を持たれる存在であらぬ言いがかりで処刑されることもある」

「聞いていらっしやったのですか」  
「情報は生命線だ。あまり遠くない距離なら噂も悪口も全部お見通しだ」

そう自嘲気味にお笑いになったお弟子さん。

あまり、魔法使いはよく思われていないようです。お弟子さんは、

そういつた陰口も聞いてきたのでしょうか。そして弟殿下様も。

「わたしたちをここへ連れてきたのも魔法使いの人々でしょう。利用しておいて、陰口を言うのは感心できません」

「そうだろ？ 俺らが邪神の眷属だので悪魔の使い扱いしているが、あいつらこそ人の皮を被った卑しい悪魔だ」

「邪神とは外来神とかいうのと同じなのですか」

「そうだよ。俺らはその邪神と呼ばれ恐れられている外来神の眷属なんだぜ」

そうお弟子さんはわたしにぎろりと凄んで見せますが、ちっとも怖くありません。

この世界の人にとっては悍ましく恐ろしいことなのでしょうか。

むしろ、腐病の他に中二病も患った友人を思い出させられ、懐かしい気持ちになります。

「神様なんていらっしやるのですか」

お弟子さんは、わたしを信じられないものを見るような目で見ました。

どうも日本人にとって神様イコール助けてくれないイコールいなという符号が成立しているようで、それが当然のような風潮となっっています。

でも国によつては無神論者は軽蔑あるいは理解できないものとして捉えられるんですけど。

「お前何を言ってる」

「見たことがないんですよね」

「まあそうだが。はははっ」

お弟子さんは笑い始めました。初めての笑顔をご覧になりましたが、とっても可愛らしいです。

「そうだな、神なんて神話に伝わっているだけだ。もしそれが下男のつくり話だったとしたら・・・くくつ。」

何百年と議論を重ねられていることも全て無駄だったということか。

学者どもにとっては議論を交わし楽しめるほどには役に立ったがな」

ちよつとお弟子さんの言葉は不謹慎に聞こえます。わたしから神様を否定したんですがね、バチがあたつてしまいそうなたたふた感が湧き上がります。

「外来神も、伝聞されたあやふやな神話から推論に推論を重ねたくだらぬ仮説といえる。俺らが普通よりも高度な存在だから一般人が嫉妬して劣等感から抜け出すために編み出されたのかも」

「先ほど、外来神の眷属なんだぜと自慢してたばかりではないですか。外来神さんまでそんなあつさり否定しなくても」

「自慢？ はっ！ 俺は神も人も男も女も嫌いだ！ 殿下としか目も顔も合わせたくないっ」

これはっ・・・愛の告白、というやつでしょうか。

あまりに熱烈なので、聞いてるこちらが頬を上気させてしまいます。

「神はともかく、男性も嫌いなのですか？」

「男は業火で焼死、女は肥溜めに沈んで窒息しろと思うほどの差はある。無論、殿下は別だ。お前がこの城の者から受けた仕打ち、あれは正当なことだったんだぜ。」

みな女どもの被害者だ。だからあいつらは男同士傷の舐め合いを

しているけど、俺はそんな女どもに乗っかりやがった男も憎んでいる」

うーん、美少年たちは普通、可愛がられるものではないですか。

あ、もしかあまりにも美しすぎるので、わたしが城下町へ降りた時と同じような目に遭われたのでしょうか。

美しすぎるのも考えものですね。

「神話を鵜呑みにすれば、制約も魔法も俺ではない奴の罪を背負わされているも同じようなものだ。けど俺はな、この容貌に生まれたこともこの力を持ち異端者とされたことも全く嘆いちゃいないんだ。そのおかげで殿下に出会えたんだから」

お弟子さんにも > 制約 < はあるのですか。では、 > 応報 < も？

『外来神の眷属』とそれらは関係があるのでしょうか。

長くなりそうですしあんまり質問しておばかに思われるのも嫌ですし、聞くのはまたの機会にしましょう。

「お弟子さん、ありがとうございます。そろそろ帰して下さい」

DQNさんのご様子が心配です。お弟子さん一人がわたしたちを元の世界へ帰すことは『できない』とおっしゃったことを伝えるのが物凄く憂鬱ですが、また新たな手を見つけましょう。

「いやなこった」

「えっ」

「お前は万が一でも王を殺すかも知れない。つまり、万が一でも殿下に危険が及ぶというわけだ。」

だから俺がお前を部屋に送らなきゃいいんだ」



何がだからなんでしょう。

「たとえこのままでも時が来れば弟殿下様が出してくださるでしょう。彼は天才魔法使いなのですから」

すると、それもそうだなとお弟子さんはため息をつかれ、あつさりわたしを部屋へ戻すために肩に手をつかれました。

「あの、最後に一つだけご質問です。

もしも弟殿下様が応報でいなくなってしまったら、代わりにあなたが帰してくれるとおっしゃってましたが、お弟子さんお一人ではできないのですよね」

「殿下の高質で莫大なお力が込められた多数の魔石を用いれば可能だと言える」

弟殿下様は嘘をつかれたということではなかった。

よかった、と心底から思えました。

「もしかして、その魔石を所持していらっしゃるのですか？

それを使ってくださったら、帰れるというのですよね。そしたらわたしは王様を殺さずに済みます」

ギロリ、と向けられる目。

「それは脅しか」

「そう思われても結構です」

ふつくしいお顔が……こわひ……。

「ばあか、間接的にも殿下は人の人生を変えてはいけないんだ。だ

から王を殺すなっつってんのに。本当に頭が悪いな」  
「いたいっ」

頭を叩かれ、気づけばわたしは妹姫様のお部屋にいました。

帰ってきたら妹姫様に問い詰められると思いましたが、妹姫様は顔を伏せ何かを熱心に見ていました。わたしもそこに注視すると、

「DQNさんっ」

赤い顔、赤い口周り、そして血に塗れた床。

その中心にDQNさんがいて、ぐったりと意識朦朧のようでした。

「あのね、トイレに行きたくて待ってたけどいつまで経っても出てこなくて……ドア開けたら、ドキュンちゃんが倒れていたの……」

DQNさんの額に手を当てました。とても熱くて、DQNさんが今まで隠そうとしていたものを思い知らされました。

なぜ、もっと早く気付かなかったのでしょうか。医者と呼ばなかったのでしょうか。

何とか言っただけでも、ただの中学生であるわたしにはどうすることもできません。

弟殿下様はわたしの危機を助けて下さりました。

弟殿下様なら、また手を貸してくださいさるのではないのでしょうか。

しかし、1時間近く経っても彼はやって来なかったのです。

## 弟殿下様だけがよすが

わたしは、王にお医者さんをお呼び頂けるように頼みに行くと言いました。わたしが殺される可能性があつてなのか、妹姫様が自分が行くので待っていてほしいとおっしゃりましたが、王はわたしがDQNさんの傍にいる限り助けようとはしないかもしれないのです。DQNさんは、わたしの味方をしましたから。あれほどまでDQNさんに執着しておられた王様です、さぞやショックと怒りを感じられたのではないのでしょうか。

しかし、DQNさんは、元の世界での病だから医者でも治せないのだとおっしゃりました。持病持ちだったのですか、と聞くとDQNさんは否定し、弟殿下様がそう教えたのだとどこか自嘲じみた笑いをしました。弟殿下様はDQNさんの病をご存じだった。弟殿下様のお力でDQNさんの病は治せないということなのでしょう。それなら、王様に帰してくれるように頼み込みましょうとわたしは言いました。すると、DQNさんは「ありがとう」と安心したように笑いお眠りになりました。

わたしは、制止しようとする妹姫様を無視し、ドアノブに手を伸ばしました。

しかし、何故かドアノブは開きませんでした。お弟子さんは、鍵穴をお変えになったとおっしゃったはずです。ならば、中にいるわたしたちは部屋の外へ出れるはずではないのですか。

お弟子さん、と呼びました。あの時お弟子さんは、妹姫様の部屋を傍受していましたから、今もこの部屋の様子を聞いていらつしゃるのではないのでしょうか。

しかし返事はなく、影すらも見せてはくれません。

もし、DQNさんを亡き者にしようとする意志がお弟子さんにあ

り、ここに閉じ込めるつもりでいたのなら。サッーっとな胸の奥が冷たくなりました。

もう、弟殿下だけがよすがです

「ん……ゴホッゴホッ」

「DQNさんっ」

DQNさんは体を浮かせ、咳き込み、大量の血を吐き出しました。傍にいたわたしに気づくと、期待を込めた目で見つめてきました。

「王は？」

「ドアが何故か開かないのです。だから、伝えることもできなくて」「なんだそれ……」

「ごめんなさい、と申し上げるにもDQNさんを苛立たせてしまいそうです。」

「俺、死にたくない」

懇願するような声。胸がきゅっとな締め付けられました。

「DQNさんは死なないです、決して」

そんなことがあっていいはずがないです。

「つーかさ、お前、何作ってんだ？」

「これは鶴です」

わたしの手には、すでに7匹目の鶴がいました。

「なんか足生えてね？」

わたしが作っている鶴は足がついており、がに股気味です。この方が活力があるように見えますから。

「まさか千羽鶴作るつもりか？」

そうですね、なんて言うのと怒られそうなので黙りました。すると、DQNさんはため息を吐かれました。

「んなもんで治ったら医者なんかいらねーよ。お前さ、自分のせいで俺がこんな目に合ってるつーのに反省してないだろ」

「……ごめんなさい」

謝ることしかできない。DQNさんはシートにもぐり、顔を背けてしまいました。

「ごめんなさい。ごめんなさい。でも、どうしたらいいのかわからないのです。」

せめてDQNさんの御心を乱れさせないように、どこかに隠れていた方がいいのかもしれない。

「……もし治ったら足の生えた鶴の作り方教えてくれよ」

小さな声でDQNさんはそうおっしゃり、わたしは驚きながらも

僅かにほっと安堵しました。完全には嫌われていない。いえ、DQ Nさんのことですからかなり我を抑えて言っただけです。Nさんの病の原因となった奴を嫌わない人がどこにいますか。

「寝息がすーすーと聞こえました。DQNさんらしくない、可愛い寝息です。」

「そういえば、妹様がいらっしゃりません。わたしと一緒にDQNさんを囲んでいたはずなのに。」

「あの子はねえ、飛ばしちゃった」  
「うわあっ」

首に走る悪寒。首を抑え振り向くと弟殿下様の人差し指を向けた状態で笑っていました。

「飛ばしたって、妹様を別の場所に移動させたってことですか？なぜですか、そもそもわたしたち以外の他者へは魔法は使えないのでは」  
「ちよつと二人で話したくてねえ。あと、他者の人生を変えない程度なら全然平気なんだよ。城の塔に移転させたから、彼女が自殺でもしない限り大丈夫なんじゃないかな」

妹様と自殺。うーん結びつきませんね。じゃあ、本当に平気なのですね。

「弟殿下様、今までどこにいらっしやっただのですか？」  
「君の傍にずっといたかもね」

愉快に笑う弟殿下様の顔が憎たらしいです。なぜ、なぜもっと早く来てくださらないのですか。

「笑えない冗談は止めて下さい。あの、何故かドアが開かないんです」  
「ほう？」

弟殿下様は、面白そうに笑みを浮かべます。

「お願いです、開けてください」

「開かないの？」

「・・・それが、わたしたちを元の世界へ戻して下さい。ご存知のようですが、DQNさんが」

「開かないのはまだ機が熟してないからだよ」

「どつという意味ですか？」

「そのままの意味」

意味がわかりません。

「ところでさあ、なんで剣を使わなかったの？ 城の奴らなんか皆殺しにしちゃえばよかったのに。それだけの力がその剣にはあるんだよ？」

「蛋白質と水に分離させる剣だなんて恐ろしい上にグロテスクですし、全く使う気になれません」

そっかーと相変わらずスマイルマークな弟殿下様。何をさらっと恐ろしいことをおっしゃっているのでしょうか。魔法使い、つまり外



来神の眷属ということに陰口言われて恨んでいるのでしょうか。こんなにニコッニコなのに。

「もし、わたしがこの剣を使っていたら計画通りってことですか？ 呪われし諸刃の剣らしいですし、とうかこうかんでわたしも王様もあばんらしいですね！」

本気ではそう思っていない。しかし、少しだけ疑惑があるのは事実です。

弟殿下様は、酷く心外そうな顔をしました。

「誰にそう言われたの？」

「妹姫様です」

「ああ、あの子の変な本ばかり読んでるからなあ。確かに外装は伝説のアザーシヴルを形どってるし能力もモチーフにしてるけど、僕の手にかかればそんな必要がないんだよ？ 僕の魔力を込めたその魔石が全てを補っている。大体、僕がそんなことをするような奴に見える？」

ニヤニヤとする弟殿下様が憎たらしいです。人の気持ちもわからない癖に、とわたしではないように傲慢な感情が沸き上がってきました。

「きっとそういうことをする人でしょう、あなたは」

だからなのか、酷く攻撃的な言葉が出てきました。自分でもアツと驚き、すぐさま反省をしましたが、口から出た言葉はもう取り戻せません。

弟殿下様の顔を見て、罪悪感と後悔が襲いました。虚を突かれたような、悲しい表情だったのです。

いつも言葉で人に傷つけられ、攻撃性のサンドバックとなつたわたしが、人を傷つけた。

「酷いなあ。お詫びにさ、僕の話聞いてよ？」

負い目で満たされていたわたしは、こくりと頷きました。

弟殿下様はこの世界の神や歴史、魔法使いの成り立ちなど色んなことを説明して下さいました。

なぜ、今こうして教えてくれるのでしょうか。何か、企んでいらっしやるのですか。

「この紙の造形すごいね、君が作ったの？」

話の途中、弟殿下様が鶴に目をつけたようです。鶴はこの世界にもいるのでしょうか。そして鳥はどうなのでしょう。

「はい、これツルという鳥なんです」

「確かに鳥に見える。君の世界の鳥は随分立派な足を持っているんだなあ」

鳥もいる、ということとは生態系は似ているのですね。へえ、と感心したように弟殿下様は鶴を一匹持ち上げました。

「一匹ちょうどいい？」

「いいですよ」

「ありがとう。僕もとんだ綱渡りだからねー。自分へのご褒美だ」  
「……自業自得ではありませんか」

弟殿下様にありがとうなんてお礼を言われると何だかむず痒いです。

そんな素直な言葉でも、トゲトゲしい口調で返してしまいます。先ほど、後悔したばかりなのに。

「ところで、聖騎士様に剣を振り上げられた時にDQNさんをわたしの元にまた飛ばしてくださいだったのも、弟殿下様ですか？ もしそうならば、ありがとうございます」

「飛ばそうとは思ったけどその前に彼が君の元に飛んできたんだよ。少し前から疑ってたけど、僕ら眷属と同様にアザーシヴルを身に傷つけることもなく使えるかもね」

「それは、どういう」

その瞬間、腕を引っ張られました。あれ、この状態は何だか既視感があります。

記憶を摸索する前に感じた、頬への何かの感触。

驚いて弟殿下様の方を見ると、悪戯に成功した子供のような顔をしていました。

「びっくりした？」

「何を考えているのですか・・・」

呆れます。この人、わたしよりも年上なんでしょうに。

はあ、とため息をついてふとDQNさんの方を見ると、彼は般若のような形相をしていました。

いつのまに起きていらっしまったのでしょ。

「てめえっ!!」

DQNさんは衰弱していた様子が嘘のように弟殿下様の胸ぐらを掴みました。

「辛いかと思っただけど案外元気だね彼。お見舞いの必要はなかったかな？　じゃあまた後でね」

弟殿下様は消え去り、DQNさんは前のめりにベッドから落下しました。その反動でなのか激しくゴホゴホと咳き込んでいます。

「DQNさんっ」

わたしは、DQNさんに駆け寄ります。しかし。DQNさんは、わたしの手を振り払いました。

息が止まり、思わずDQNさんの顔を見て心臓が凍りました。そこには、強い敵意と憎しみが滲み出ていました。

「お前さ、何してんの？」

憎しみの目がわたしを突き刺します。

「あんな奴とイチャついて、恥ずかしくないのか？　俺が、あいつに何されたかわかってんの？」

「何、をされたのですか」

わたしの知らないところで、弟殿下様は何かをおやりに。

「俺がこんな苦しい病にかかってんのもあいつが俺の免疫を壊したせいだとき。馬鹿にするように言われた」

なぜ、わたしは弟殿下様がDQNさんに何もしないと思い込んで

いたのでしょう。彼は人を殺させてまで王座を手に入れようとしていたではありませんか。

真っ直ぐと視線を合わせたまま、沈黙が続きます。

「鶴なんか作りやがって。俺を嘲笑ってたのか？」

DQNさんは鶴を一つ手に取ると、ぐしゃっとお潰しになりました。そして、また咳き込むと、喀血なさったのです。

鶴は千年亀は万年。そんなの嘘です。弟子さんが言うようにただの作り話です。

鶴を折ることなんて、DQNさんの気休めにもならなかった。ただの自己満足でした。

「待っていてください。今、王様に会って来ますから」

ドアノブは回り、わたしは部屋の外へ出れました。弟殿下様のいう『時』が来たのでしよう。

部屋の前には、聖騎士様がいらっしやりました。

## DONさんの独白

死ねばいいと思った。

っーか死ね。死んでくれ。

人に死ねと言う以前に俺が死にそうだけどな！

頬にちゅっとかさ、本当にふざけんなって話だ。

あいつ、自分のせいで俺がこんなところに連れてこられてアッー！

！！！！<自主規制>な世界まで見せられたって自覚ないのか？

人が死にそうな時に、イチヤイチヤしゃがって・・・ふざけてんのか？

ああ？！！

特にひでえのはあの赤毛野郎だ。

あいつの頬にキスして、俺に笑いかけやがった。

嘲笑。あの、馬鹿にして見下したような笑い。

モテない男相手に優越感に浸ってたのか。

一応俺だって今モテ期来てやがるんだ、野郎限定にな！

ふと、思い出した。

あいつ俺らを元の世界に戻すよう王に頼みに行くって言ったんだよな。

そういや、あいつには極刑命令が出されていたんだっけ。

自分の苦しさをかりで忘れてたな。

まあ、どうせ感染されると逃げただけかも知れないし・・・。

大丈夫だろ。

DQNは再び眠りに身を任せた。

弟殿下様があんな風に話してくださったのも、わたしに王様を殺して欲しかったからでしょうか。

「自ら部屋から出るとは。殺される覚悟ができたのですか？」

「この淫魔が！ 姫様をお返しなさい！」

阿修羅のようなお顔をした侍女さんが今にも掴み掛ってきそうです。聖騎士様の手前本能の赴くまま行動を取る訳にはいかないのでしょうか、ぶるぶると震えるこぶしを手で押さえ、フッーフッーと猫のように威嚇のポーズをしています。

「はい、わたしは殺されます」

「潔いですね。その姿勢に免じて、痛みを感じる間もなく冥土へ送って差し上げましょう」

「いえ、わたしはあなたではなく王様に殺されるべきだと思つのです。ですから、王様の元に連れて行って下さい」

「いえ、私があなを殺します。あなたが王に危害を加えないとは限らないでしょう。御神賜様を騙つた淫魔なのですから」

カチリ、と鳴り響く剣。一步下がってしまいそうな足を踏ん張ります。

「では、わたしを殺す前にDQNさんのご様子を見てください。わたしが王の御前に赴きたいのも、DQNさんの病を伝えるためなのです」

わたしはドアを開けました。血の入った金属の洗面器の横に寝てるDQNさんが聖騎士様の目にもはっきりと入ったはずです。聖騎士の顔が青ざめました。侍女さんはドアが開いた途端、理性が感情に負けたように、物凄い勢いで部屋をあら捜し「姫様はどこだ」と隅々までお探しになりました。

「御神賜様、ここまで・・・」

「弟殿下様曰く、これはわたしの世界の病気で、わたしの世界の医療技術でなら簡単に直せるのです」

「・・・その病気は、あなたもご存知か？ 死に至るものなのか？」

「はい」

はつきりとはわかりませんが、そう言った方が聖騎士様も納得して下さるでしょう。

「しかし、王にあなたが何をするか・・・」

「ずっと見張っていてください。わたしは何もしませんから。ただ、わたしが死んだ後にDQNさんを日本へ帰すように命を持って約束をするだけです」

聖騎士様は頷き、わたしを王様の元へ誘って下さりました。王様も、好きな人がこんな状態となれば、帰してくれるのではないですか。わたしならそうします。ただ、胸によぎる不安の霧が色濃くあります。



「聖騎士様」

「なんですか」

「DQNさんが、聖騎士様を褒めていました。あなたは良い奴ですと。万が一でも王がDQNさんの帰還を渋りましたら、説得して約束を守ってくださるようお願いくださいね」

「言われずともそうします」

わたしは、DQNさんに甘えすぎたのです。このような事態を引き起こしたのもわたしです。でも、DQNさんはわたしに仲間意識を持って下さった。わたしのために戦ってくれて庇ってくれて。それはわたしの望む情でした。喉から手が出るほど欲しかった、DQNさんからの情。それを手放したくないが為に、わたしがDQNさんをこの世界に巻き込んでしまったという事実を告げられなかった。そして、この夢のような出来事に罪悪感に襲われながらも、声に出せない喜びを持っていました。あまつさえ、ずっとこの状況が続けばいいとさえ思っていたのです。

もっとDQNさんがわたしを庇って、わたしのために怒ってほしい。なんとという自分勝手な思いなのでしょう。幼子のような欲望に申し訳なささと羞恥心がわたしを攻め立てます。しかし、それを遙かに上回る無上の喜びが、ドンと中心に居座っていていたのです。

そんな時に目を覚まさせてくださった、真実を知ったDQNさんの怒り。それは、わたしの身の程知らずな凶々しい思いを打ち消す役目を果たして下さりました。

あの王座に王様はいらっしゃりました。眼はどこか虚ろで、わた

しに気づくと、殺意を露わにしました。

「妹まで誑かすとは。恥を知れ!!」

王様がイノシシのようにこちらへ猛進し、わたしを掴み上げようとした時です。ゴホツゴホツ、と口に手を当て、激しい咳をなさりました。

「王様、風邪ですか」

この世界は、向こうの凍える季節とは違い、心地よい春の様でした。そんな気候に、風邪なんて。突き動かされるように疑問は口から放たれます。

「血は、吐かれましたか？」

そう聞くまでもなく、王様の口からは夥しい量の血が伝いました。まさか、と。いえ　　そうです。DONさんの菌が、ずっと傍にいた王様に移ってしまう可能性がありました。

ならば、わたしに弟殿下様が望むまでもなく、王様は。

## 憎しみの正体

聖騎士様は、王様に駆け寄り、医者を呼ぶように指示しました。王様が血を吐かれた。その意味するところは？いえ、まだ早合点でしょう。

「聖騎士様、王様は吐血するほどの持病を持っておられるのですか？」

「王は食の嗜好が極度に偏っており体調を崩されやすいですが、喀血をなさるほどではありません！」

持病ではないとなると、王様はDQNさんの病気に感染した可能性があります。

聖騎士様もわたしと同じ考えに辿り着いたようで、顔を蒼白にさせました。

「医者なんぞいらん！ どうせ役に立たぬ！ そんなことよりこの淫魔の処刑だ！一刻も早くこの女を捕らえる！」

「わたしは殺されます。ですからわたしの話を聞いて下さい」

どうせ役に立たない、というのは王様自身が医者に診てもらったからでしょうか。

弟殿下様はきつとこの場で見ているはずです。もし王様が病死するとすれば、わたしに王様を殺させなくともよいことになります。王の命で、美少年兵たちが問題無用でわたしを捕まえようとしません。聖騎士様は、わたしの前に庇い立てするが如く剣を抜きました。

「聖騎士、何をしておる？！」

「王、御神賜様は病気に瀕していらっしやります。命が危うく、一

刻を争う事態です。その病は御神賜様の世界発祥のものであり、この世界で治すことは不可能です。

御神賜様は、幾度と無く王を裏切り、この女の肩を持ちました。しかし、王と御神賜様の仲を引き裂いたこの女は自ら死を望んでおられます。御神賜様は淫魔からの呪いから解放され、王に寄り添いたいとお考えになるでしょう。

例え、御神賜様が元の世界に戻ってしまったとしても、また召喚すればいいのです。前例がないことであり、特定の個人を呼ぶことはできないことだと言われていても、生きている限り不可能ではないのです。

どうか、御神　ドキュン様を、元の世界に  
「そうか」

王様の固く結んだ唇。そこから感情は伺えません。王様は、DQ Nさんがご病気でお亡くなりになられてもいいのでしょうか？無性な悔しさと悲しさがこみ上げます。

わたしは、足の付根に装備した呪われし剣を手に取り、王様の方へ投げました。王様に仕えていた美少年兵は、後退りながらも王様を守ろうと剣をわたしに向けます。

「よろしければ、これでわたしを貫いてください」

王様が、わたしを見据えました。試すような、観察するような瞳です。

「これはどこで手に入れた？」

ギクリ、としました。

妹姫様のように、その剣が正体がわかってしまっているのでしょうか。

「貴様に見合わない綺麗な剣だな」

ほっとすると共に脱力します。王様は呪われし剣を宙に振りました。すると、刀身が一気に5倍も大きくなりました。そういう仕様だったとは。王様がさも当たり前のようにしていたので、この世界では当然なのでしょう。

「お望みどおり、僕の手で貴様を送ってやろう」

鋭く長くなった伝説の剣の刀身が向けられます。わたしは目を瞑りました。呪われし剣といっても弟殿下様はそれを否定してましたね。けど呪われし剣なんでしょう。

もうあんな酷い人信用しません、DQNさんにまで手を出すなんて酷すぎます。

妹姫様が言うとおり、この剣は使手にまで破壊をもたらす剣なのです。弟殿下様はわたしを亡き者にして、王の座に就こうとしたのです。

といっても、酷いのはわたしも同じですね。呪われし剣を王様に使わせ間接的に殺めようとしているのですから。

初めは、恋敵である自分がいなくなることで、王様もDQNさんを治そうと考えてくれると思いましたが、王様のこのご様子では、DQNさんの死を願っているように見えます。できれば、誰も殺めたくありませんでした。けどDQNさんが、少しでも帰れるように。

「聖騎士様、絶対にDQNさんを元の世界に戻してくださいね。何

があっても」

返事はありませんが、きっと聖騎士様は何があってもDQNさんを元の世界へ戻してくださるでしょう。

そういえば、伝説の剣を使わせたとして弟殿下様はどうなりますか。剣の所有者は弟殿下様からわたしへ、それから王様へ渡りましたから、弟殿下様に応報はつかないのでしょうか。王とわたしが死に結局は王の後を継ぐ弟殿下様が一人勝ちと言えませんか？

ああ、なんだか悔しいです。しかし、弟殿下様が王の後に継いでしまったらDQNさんの元の世界への帰還を阻害しようとするかもしれません。DQNさんの病気をもたらしたサドな弟殿下様なので、それならどうすれば……。

色々な考えが頭をよぎります。死ぬ直前は長く感じると言いますが、さすがに長すぎです。

目を薄らと開けると、王と聖騎士様がぎりぎり剣で押し合っていました。

「淫魔に心を奪われたか！」

「違います！ 王、彼女を殺める前に、御神賜様を確かに元の世界へ戻すという誓いの証明書に呪血判、魔法使いたちにドキョン様を元の世界へお戻しになるよう要請する文書を作成してください」

「なぜそんなことをしなければならぬ、聖騎士、僕が信用できないのか？」

「王のその表情は約束を守らない時の顔です！」

わたしも王様の表情と態度には不自然さを感じましたが、王様と付き合いが長いだけあってよくわかっていらっしやるのですね。た

だ、目的を達成するためには余計なことでした。

「王、」

「男も女も関係なしに、美しい者は敵だったのだ！ ドキユンの裏切りがそれだ！ 美しい皮を被った豚である女に靡くなど」

「あなたの愛したドキユン様は外見などというものだけではなかったでしょう。その心根は美しく、真っ直ぐでした」

「だまれ！ おい淫魔、自分が美しいからと思えばがるなよ。

僕のこの容貌が醜いと思っているのだろうか？ 僕そっくりな妹のことも見下しているのだろうか？

影では民のように化物たちの城とか抜かしておるのだろうか？」

王様は聖騎士様に行動を阻害され、今まで見たことがないほど憤怒しています。

聖騎士様の行為を裏切りと取ったのでしよう。

怒りのあまり、言っていることがよくわかりません。

お美しい方々の容貌が『醜い』『化け物』だと思っはすが……

思い浮かぶは、お弟子さんのお話。

『みな女どもの被害者だ』

城に集められたく美少年たち。いえ、わたしが勝手にわたしの世界の価値観でく美少年だと思っ込んでいただけだったので。

わたしの世界の価値観ではDQNさんやわたしはトンデモなく不細工ですが、この世界では絶世のく美人。

ならば、わたしがく美人だと思った人々は、この世界ではわたしと同じ立場の方々だった、ということですか？

今まで腑に落ちなかった点が次々と一つの要因へ連結されていきました。

劣等感を呼び起こされるために、<美少年たち>はこの世界では美しい女であるとされたわたしに過剰に反応し嫌がらせをしたのでしょうか。城から出れば言葉が理解できなかったのも、わたしたちの逃亡を防ぐため、というよりも、王や<美少年たち>が集う城への民の罵りを聞かせたくなかったから？

同性愛がこの城で蔓延していたのも、異性の評価にシビアな女（異性）への嫌悪が一因？

外見に振り回された自分と王様を重ね、先程殺そうとしていたことも忘れて憐憫の情が溢れ出て来ました。そして同時に、酷く疲れしました。なんてくだらないのですか。薄皮一枚、されど人生も自身すらも大きく変えますが。

「美しいものは皆死ねばいい！ 奴らは自らが優位にいると錯覚し傲慢に振る舞う悪魔だ！」

「死ねばいい、なんておっしゃるくらいならDQNさんを向こうの世界に帰してください。目の前から消えることとほぼ同義です」

かつてなかった程の怒りがこみ上げます。DQNさんに対し死ねばいいなんて言葉を言い放ってはいけないのです。王を殺そうとしたわたしが思うのもなんです。

しかし、怒りはすぐに羨み、侘しい虚無と悲しみが襲います。王様は、外見に惑わされた人々に傷つけられたのでしょうか。それはわたしも同じです。けどだからといって自分もそんな風に目の前の人を判断し、人を蔑ろにしてもいいことにはなりません。決して。それを伝えたところで、王様は聞き入れてくれないでしょう。魔法により、言葉は理解できるのに、意志疎通ができない。わかりあえない



い。それがこんなにも人を疲弊させ、やるせない気分させるとは知りませんでした。

「馬鹿なことを！ あろうことか、あやつは僕に剣を向けたのだ！」

王、と絶望の含んだ声。

「聖騎士、僕よりもDQNを優先するのか？！ 僕の苦しみを知っている貴様が！」

聖騎士様は圧倒的な力で呪われた剣を王の手から落とし、それを見て我に返った美少年兵が聖騎士様に切りかかるうとしました。

聖騎士様は襲う刃から免れ、その隙に王様は腰元の剣を取り、聖騎士様の剣を飛ばしました。

王は憤怒に襲われるまま剣を振りかざし、わたしを、聖騎士様を、突き刺そうとしていました。

呪われていない普通の剣では駄目なのです。

わたしだけでなく聖騎士様が死に、DQNさんの死を望む王様が残る。

さすれば、DQNさんは。

衝撃はありません。反射的に瞑った目を開くと、そこには弟殿下様がいらっしやりました。

弟殿下様の手に握られていたのは、王様の持っていた無駄に装飾の多い剣。

わたしは状況を理解しました。

王様がわたしと聖騎士様を殺めようとし、弟殿下様がそれを歯止めた。

「弟殿下様」

なぜ、と問う間もなく、<応報>と呼ばれている何かが発動されたのです。

## さよなら

あの時、罪悪感を抱えたまま、DQNさんの容態を気にしつつも、弟殿下様と色々なお話をしました。

常に気が抜けなかつた弟殿下様相手でしたが、この時、心の琴線に触れたような、どこか近づけたような気がしたのです。

『君がまだ元の世界で生活していた時、僕は君に会ったんだ。君は王の隣でニコニコと笑ってて、城の塔から民に手を振ってたよ』

『おっしゃる意味が1つも理解できません』

『わかりにくかつたかなあ。予知夢というものだよ。予定されている未来が見えたんだ』

『予定とは、いわば運命のようなものですか。王様とわたしが笑い合える関係になれるとは到底思えません』

『決まっているのかはわからないなあ。王はDQNくんにメロメロな上に君とは修復不可能くらいこじれてるしねえ。もしかしたらDQNくんは予定調和外の人物なのかもしれない。異世界のある故に見積もりに誤りが生じたとか。その場合、今の僕らがいるのは変わってしまった予定調和外の世界だということになる』

『よくわかりませんが、DQNさんが予定調和外の人物だったとして召喚に巻き込まれたのだとします。本来ならわたしと王様は仲良くしていたということですか？』

『そうだね。君は王妃としてこの国を王と共に治めていたんだ。ただ、DQNくんもひっくるめた予定調和外だったのなら、君は直に王と仲睦まじい夫婦となる。』

僕には君と王の仲が修復するとは思えないから、ここは予定調和外の世界だと思うけどね』

『予定調和外であることに便乗して、弟殿下様はわたしに王を殺させようとしているのですね』

『そうそう。殺す気になつてくれた？』  
『……それさえも予定調和内で、逆に弟殿下様が殺されてしま  
う未来があるかもしれませんよ』  
『それでも悔いはないな。成し遂げたい野望を持つて夢半ばに死ぬ  
男つて素敵じゃない？』  
『理解できません』

弟殿下様の足元の影から闇が生まれ、粘着質な液が零れているか  
のようにゆっくり重く広がっていきます。

「殿下あ！」

突如姿を現したお弟子さんが蒼白な顔で弟殿下様に駆け寄りまし  
た。  
弟殿下様は手で制します。お弟子さんは堪えるように足を止めま  
した。

「お前つ、なぜここに……それより自分の行動がわかって  
いるのか?!」

王様が動揺しています。弟殿下様が、<応報>を受けてしまう。

< 応報 > がどのようなものかは皆の顔色を見て、ただならぬことなのだとわかります。

「危険です、殿下からは離れてください！」

王のことなど忘れたかのように美少年兵たちはキヤーキヤーと弟殿下から逃げていきました。

弟殿下を気にしつつも、王様たちはその場から離れます。その場に居座ろうとしたお弟子さんは聖騎士様の引っ張られて行きました。

闇は弟殿下様を囲うように広がり、１メートルほどの円でびたりと止まります。

この場に残ったのは、わたしと弟殿下様のみです。

「君も逃げた方がいいんじゃないかな？」

「わたしはきつと平気です。異世界人ですから」

「どうかなあ」

弟殿下様は笑いました。怯えは億尾にも出してません。それが、無性に腹立たしくなります。

闇からは、びくんびくんと動く触手のようなものが生成され、弟殿下様をぬるぬると抱いています。

「質問があります。わたしが乱暴されかけ、DONさんをわたしのところへ運んでくださったのは何故ですか？ 理論上うんぬんと考えたのでしょうけど、< 応報 > がつかないとは言い切れなかったじ

やないですか。」  
「さあ。なぜだろうねえ」

弟殿下様は奇妙な微笑みを浮かべています。妙にもどかしいです。

「もう一つ疑問があります。異世界人であるわたしたちに魔法をかけてもく応報はつかない。ならば、初めからわたしやDQNさんを操作して王様を殺すことが可能だったのではないですか」  
「できれば君の意志で君の未来の夫を殺して欲しかった」  
「どうして」

そう聞くと、弟殿下様は仕方なさそうな顔をしました。

「王の横で妻として微笑む君なんてこの目で見たくなかった」  
「なぜ」  
「どうしてなんでってねえ・・・本当に鈍いな君は。君がここに召喚される前に、予知夢で君の映像が何度か流れこんできたといったね。実際に会って、君の心を読んで、君を理解し心を通わせた気になって、一方的に情を持っただけ」

焦りを含んだ早口の言葉は最後まで言えず、弟殿下様は飲み込まれたかのように闇へ吸い込まれたのです。  
どこかわからない世界へ。

「っ！！！！！！」

美しい者は皆死ねばいい、と王様は言いました。

しかし、どんな人間にも必ず美しいところはあるのです。

たとえば、DQNさんを見殺しにしたり殺そうとした王様や弟殿下

様にだつて。

「弟殿下さま」

弟殿下様は姿形もなく、消え去りました。

DQNさんが元の世界へ帰って行きました。

DQNさんの帰還は、お弟子さんに王様が直に頼んで実現しました。とはいえ、王様がわざわざ頼まなくとも、弟殿下様の遺言でもありますから、お弟子さんは形見ともいえる魔石を使いDQNさんを帰してくださったでしょう。

<応報>を受ける直前、弟殿下様は、王様とDQNさんのウイルスを打ち消してくださったそうです。

未知のウイルスがこの世界に広がってしまうことを懸念しましたが、それは杞憂だそうです。

お弟子さん曰く、弟殿下様は王様への感染を確認した後、すぐに外へ吐き出された全ての菌を瞬間浄化するようにしていたということです。

元々その菌自体が弱く、免疫によりすぐに封じられてしまうものらしいのですが、王様のように極度に偏食で栄養状態が悪いと、感染から発症しやすいということです。好き嫌いはよくありませんね。

「ドキュンは帰っていった」

王様は憔悴しきった様子でした。

「最後に会わなくてよかったのか？ 僕は会わせたくないが……  
・ドキュンはお前のことを気にかけていたぞ」

「はい、いいんです。ところで何故DQNさんを素直に帰す気にな  
ったのですか？ あれほどまでに頑なになっていらっしやっただのに」

あれだけDQNさんにぬとぬとした執着を持っていた王様が、D  
QNさんを自ら元の世界へ帰そうと言っただのは意外でした。そして、  
わたしへの態度も何だか軟化してる気がします。

「それはだな……」

王様は、愛する人を見殺しにしようとした身勝手さを恥じ（！）、  
もうDQNさんを愛する資格はないと考えたそうなのです。

あの時の我儘すぎる言葉は、死に対する恐怖から、自分のことし  
か考えられなくなっていたのでしょうか。

「お前はあの男と恋仲だったのか？」

あの男、とは弟殿下様でしょう。王様は弟殿下様の企みを知りま  
せん。わたしも話す気はありません。

「いえ。……弟殿下様がいなくなってしまうって、悲しいです



か？」

「特にはな。兄弟としての情もありはせぬ。所詮は邪神の眷属だ」

顔に滲むのは嫌悪。弟殿下様はこうした自分ではどうしようもないできない偏見を一身に受けてきたのでしょいか。

「だが、僕の病気を治してくれた。感謝はしている」

感染したきっかけも弟殿下様が作ったのですがね。

「ところで、貴様は何故ここに残ろうと思ったのだ？」

「この城を出たとき、この世界で生きる人々の姿が見えました。彼らの生活をより裕福に、幸せに満ちるものになりたいと思ったのです」

ウソです。圧倒的な建前です。

実は、わたしは王様と同じです。DQNさんを殺めようとした王様の気持ち痛いほどわかるのです。

DQNさんの隣に誰かいる姿を見たくない。

DQNさんが、わたしに振り向くことは絶対にはないのです。

ならば、DQNさんの隣りに立つ女性を見ないで済むこの世界で、静かにDQNさんの幸せを願うことが一番ベストだと思いました。

DQNさん、DQNさんはこの世界でちやほやされてどうでしたか？

DQNさんは、自分の容貌が美しいとされているから好かれたのだと思っていましたね。

結局は王様も聖騎士様も、DQNさんの心根に惹かれたそうですが、この世界での経験で、DQNさんが抱えていた劣等感を少しでもほぐせたのなら良いです。

どうか、幸せになってください。

## すべては予定調和の内の

「王妃様ばんざああああああい！！！！！」

「王妃さまあああああ！！！！！！！ すてきいいいいいい！！！！！！」

「お綺麗ですううううううううううう！！！！！！ 王妃様あああああああああ」

弟殿下様がおっしゃっていたとおり、わたしは城の塔で王と共に笑顔で民に手を振っています。

つまりわたしは王妃の立場にいます。あれから数年の時が経ちました。

隣にいる王は、いつも通り自分への歓声が上がらないために拗ねる一歩手前のようです。

「王！ しっかりしろ！！！」

民に見えないように身を屈め王を励ますのは、王の寵愛を受けている少年。

王はでれでれと顔を破顔させ、シャキンと立ち直りました。

妻としては悲しいものです、夫が堂々と愛人（男）を連れてきて鼻の下を伸ばしているのですからヨヨヨ。

なんてことも思わず、王の民に対する無関心な態度を叱咤してくれるのですから本当にありがたく重宝しています。

ちなみに彼、DQNさんには劣るものの、絶世の美形だそうです。

わたしにはおかめ納豆そっくりな容貌に見えるのですが……

まあこの世界でのお約束ですね。

公務を終え、自室に戻り、全地域からの報告が書かれた書類へ目を通します。これ、本当は王の仕事なんです。なんでわたしがやっているのでしょうか。ダメです、考えたら負けです。

この数年間、色々なことが起きました。わたしは無関心な王に代わり、この国の実情を学び、少しでも良い国にしようと努力してきました。

特に、わたしが城下町でこの身を持つて体験した誘拐婚。取り締まりを強化し、加害者を裁判にかけたり、やめようキャンペーンを実施しました。しかし誘拐（召喚）されて最終的に結婚したわたしが取り締まるのも説得力がねえなあと思ったり、反対する者に暗殺されかけたり。

この件に関しては、罰則強化する以前に誘拐され不本意に夫と結婚せざるを得なかった女性たちのことなど問題は山ずみですが、一歩ずつ確実に進められています。

聖騎士と妹姫様は、なぜかいい雰囲気になっていきます。意味がわかりません。いつのまにそのような関係になっていたのでしよう。

「傷のなめあい」と妹姫様は称していたので、もしかしたら妹姫様はDQNさんに恋をしていたのかもしれませんが。

DQNさんがもう少し長くこの地にいたのなら、二人はカップルになっていた可能性が大です。ああDQNさんが元の世界へ戻ってくださってよかったです！

お弟子さんは弟殿下様の研究の後を継ぎ、弟殿下様をあの世界から連れ戻す為に色々模索しているそうです。生死が心配になるくら

い、部屋から出てきません。

DQNさんは……何をしていたらっしゃるのでしょうか。今は高校三年生でしょうか。たまにわたしのことを思い出してくれたらいいなと思いを馳せてます。

一通り終わり、ふうとため息をついて顔を上げると。

そこには、弟殿下様がすっぽんぽんで立っていました

「な」

「久しぶり」

「応報は、」

どうなすったのです、というのは驚きのあまり声に出ず。

「<制約>という制度がなくなっただよ」

そういうと、弟殿下様はすっぽんぽんのまま嬉しそうに空中浮遊をして一回転しました。

<制約>がなくなっただよ？ どういうことなのでしょう。

わたしの心の声を聞いた弟殿下様は、にっこりと笑い、答えてくれました。

「念が送られてきたんだ。君たちからの、あまりに強い念。君が作ってくれた折り鶴が受信の役割を果たして、僕にエナジイを与えてくれた。それが制約の番人を滅するくらいのものでさ。あんまりにも簡単に滅ぼせたから、何かの罠かと思ったよ。エナジイの生産と魔法

の操作は別問題だから実感はないだろうけど、君が巨大な力を有していることは間違いない。召喚された異世界人がかなりの力を保有していたことがたまにあったそうだけど、君も同じだったようだね。神が人に劣るわけがないということと後に書き換えられてしまった神話も信憑性を帯びてきたなあ。神を凌駕するほどの勇者が悪なる外来神を滅すために神と協力し戦ったという神話なんだけど、勇者は異世界人だったのではないかという説があるんだ。

圧倒的な力を手にして、この勇者は君たち異世界人だったのではないかと身を持って思い知らされたよ」

なんか意味のわからんことを言ってる。弟殿下様が帰ってきた。その事実を咀嚼しようやく理解すると、ぶるぶると全身が震えました。

震えを抑えようにも止まりません。会いたくて震えるならぬ会えて震えます。

弟殿下様の腕が伸び、わたしを自らの胸へ引き寄せました。その行動に啞然とし、わたしは顔を上げました。

「君がそんなに僕を恋焦がれていたとは。あまりに熱烈な気持ちでエナジイから伝わってきたけど、実際目にするると照れちゃうなあ。そうそう、制約番人がいなくなっちゃって一部の魔法使いたちが暴れるだろうけど、君と僕とならすぐに解決できるよ」

恍惚とした弟殿下様の視線がわたしを貫きます。ところで、聞き捨てならない言葉が耳を過ったのですが。

「恋焦がれるの意味がわかりませんが・・・ああ、確かに想い出すたびに、激しい憎悪が湧き上がりました。まるで熱烈な恋のようだったとも言えます。こんな激烈な感情を持て余したの、初めてで

したから。

「……あれ、なぜわたしが怒っているのかご理解できてないようですね？」

DQNさんを発病させたことを、もうお忘れで？ その癖あのよ  
うにわたしの命を救おうとするなんて。わたしの命だけで帳消しに  
なるとでも？ 脳裏にあの時のことがかすめるたびに煮え繰り返る  
怒りが増してもう腹が立って腹が立って腹がたって腹が立つ」

弟殿下様の顔が徐々に陰って蒼白になっていきます。

「いやー、怒らないですよ？ 事が終わった後に治すこと前提だった  
んだからさ。そりゃあ僕にとってははにくき恋敵だけどまさか殺す  
なんて」

「王を殺させようとした人が何を言いますか！」

ギャアアアアアア、という叫び声が城を響かせました。

「いやあ、君は身も心も強くなったね」

「あのようなのが王で夫なのですから当然です！」

「立派に王妃やっているようで安心した。僕は向こうでも君を心配  
して、」

「手は緩めませんよ？ ところで先ほどおっしゃっていた君たちが  
らの念とは、わたしの他に誰のことですか」

ギクリとしたような顔。妙に怪しいです。

「僕は恋敵に塩を送るようなことはしない！」

「何をおっしゃっているのですか？」

ばさつと何かを落としたような音。

振り向けば、お弟子さんが。

あ。

弟殿下様が抱きしめられました。



すべては予定調和の内の（後書き）

次で最終回です

## 坂本くん（最終話）

同級生の杉浦律は帰って来なかった。

俺と杉浦が同時期に姿を消したもんだから、カケオチだと本気で騒がれたらしい。カーチンは事情聴取されたという。

カーちゃんごめん。そう俺が素直に謝ると、目玉飛び出るくらいに目を大きく見開かせてカーチンはびっくりしてた。そしてガチで俺が杉浦に何かやったのだと思ひ込み、腕を捕んで物凄い勢いで揺さぶった。どんだけ自分の息子を信用してないんだよ。

杉浦の祖父が家を訪れてきて、カーチンは息子が迷惑を掛けていると平謝りしたそうだ。だが、杉浦の祖父はむしろありがたいと言い、杉浦の悪口を散々零したらしい。杉浦がこの世界に戻って来なかったのも、こんな身内がいる家に戻りたくなかったのかも知れない。

きっと、杉浦が帰ることを拒否したのも俺のせいではなかったのだ。俺のせいなんて考えるのもとんだ自意識過剰かもしれないけど、それだけ酷いことを言ったりした。だから、杉浦の祖父のことは幾分ほっとさせた。同時にそんな自分に自己嫌悪が沸き上がってきた。杉浦に帰ってきて欲しかった。今度こそ、この世界で優しくしてやろうと思ったのに。

今の思考を反芻し引っかかる。もし実際にあいつが帰ってきたとして、本当に優しくしていたのだろうか。皆の手前、そんなことできなかつたのではないか。カケオチしたなんて噂が立つから、俺は噂を否定したいが為に益々あいつに当たったんじゃないか。

そんな自己中心的な俺を、杉浦は笑って許すだろう。俺も杉浦の優しさに甘えていたかもしれない。

想像通り、学校に登校するとニヤニヤと顔を歪ませたクラスメートの顔が無数にあった。気持ち悪い、と思いながらも仮面を被りノリのいい挨拶をした。

「ところでさあ、杉浦のことなんだけど」

卑しさが全面に露出した笑顔に不快感が止まらない。

俺もこいつらの一員だったのかと思いつつも、失踪中に流れた噂について聞き出した。それは全て胸糞悪くなるような内容ばかりだった。堪忍袋の緒が切れ、茶化すような発言をした奴は男子も女子も関係なくぶっ飛ばした。

イケメンも同様だ。頬を抑え驚愕に震えるイケメン。杉浦のこととは関係なく爽快な気分になった。

廊下に出た後もイケメンは追いかけてきて、「お前まじで杉浦が好きなのかよ」「無視すんな」と半ば縋りつくように言ってきた。トロロのようなしつこさにブチ切れる直前の俺だったが、「俺のこととはどう思ってたんだよ!」とあまり想像したくない言葉が飛び込んだのでダッシュで逃げた。追いかけてきたので死ぬ気で隠れた。目がマジになっていて、心の底からの恐怖を感じた。それでも体育倉庫にすることはバレてしまつたらしく、うろつろとしていた気配を感じた。恐る恐る跳び箱の中で隙間から覗き様子を窺えば、イケメンが下半身露出して俺の名前を呼んでいる姿が目に入った。俺はもう見つかったら何をされるかと泡を吹いて気絶する寸前だった。もう××はたくさんだ!

俺は学校に行かなくなり、家に引きこもるようになった。それを心配したのがカーチャンだ。親父と離婚した後、女手一つで育てて

くれたというのに申し訳ない。けど、俺はもうあいつらと関わりたくなかったし見たくなかった。

ある日、仕事が終わってくたくたのカーチャンにあの世界での出来事を話した。どうせホラだと受け取られるだろうから、面白おかしく全てを吐いた。けどカーチャンは信じてしまった。信じてくれるという期待があったことは否めない。だが、アッー！！！！（自己規制）の部分も話したからむしろ疑ってほしかったかもしれない。カーチャン曰く、俺がやけに大人びたのと溢れる色っぽさが出てきたからこれは尋常でない出来事があったのだと推察していたらしい。俺みたいなブサイクに溢れんばかりの色気って……痛すぎるだろ。

カーチャンは俺の繋がりのない話を読み取り、大層納得したように頷いた。

「つまり、のぶくんは律ちゃんに罪悪感を抱いているんだな」

「ワリいかよ！」

俺は自分が死ぬのが怖くて杉浦に当たりまくった。王の元へ行くように促した。

嫌な噂を流しまくったあいつらよりも夕チが悪い。死ぬように行動を強制させたようなもんだ。

それでも罪悪感からの逃避ゆえか心のどこかで俺は悪くないと思ってしまう。俺は杉浦に巻き込まれ、あのクソツタレ赤毛カマ野郎に病気にさせられたのだから。無論、杉浦は無実だ。だが、それを心から理解できない。

「それはのぶくんがガキだから」

カーチャンは一言で片付けた。まあ……そうなんだろうな。

俺がガキだからだな。うん。

「だからといって子供であることを名目に自分を許しちゃ駄目。日々自分を叱咤することで人は変われるのです。わかった？」

「うるせーよババア！ 偉そうなこと言っくんじゃねえ！」

「うーん、反抗期なんだから。それで、何で学校に行かないの？」

うっと言葉に詰まる。

「それも律ちゃんのこと？ カケオチってことで色々言われることが嫌だった？」

「あいつら、杉浦のことをあまりに悪く言っただ」

「ふうん？」

「良い奴らだったんだ。失踪中のメール見て本当に俺のことを心配してくれてたってわかったし。でも」

自分でも、何故こんなにもショックを受けているのかわからない。俺はあいつらを仲間扱いしていたことを後悔していた。確かにあいつらは俺のことを本気で心配してくれた。絆があっってお互いに信頼していた。俺はあいつらが好きだった。

それでも、杉浦への悪意のある言葉は許せなかった。杉浦が蔑ろに貶められ嘲笑されていることが自分のことのように辛かった。その一方で、自分も杉浦のように言われる可能性があった、もしくは言われていたのだと考えると背筋が凍るような思いがした。

「もし、巻き込まれたのが別の子でのぶくんが律ちゃんの良いところを知らなかったのだとするよ。そしたら、皆のように噂しなかったと断言できる？」

「できない」

即答だった。どう考えても、あいつらと同じように卑しい顔で面白おかしく噂をしていたらう。

「それが人間だよ。良いところも悪いところも両面あるんだよ」

カーチャンの返答はありきたりだったが、確固たる真理だった。イヤダイヤダと目を背けていても、最終的には受け入れるしかないのだ。

ベッドに横たわりながら、あの世界を思う。本当にふざけた世界だった。あの世界での出来事全てを夢だと思いたかったが、現在も続く杉浦の失踪と俺が手に握っていた足の生えたキモい鶴が否定する。

「なんで帰って来なかったんだよ」

そうすれば、俺は。

あの時、目を覚ましすぐに苦痛が取り除かれていることに気づいた。

ベッドを囲うように、周りには王と聖騎士、弟殿下の弟子がいた。俺を元の世界へ帰すのだという。

あいつは、と聞くと王は首を振った。

震える唇で杉浦を殺したのかと聞くと、聖騎士は彼女は自ら望んで残るのだと答えた。

偽りではない。聖騎士は嘘をつけないからだ。

杉浦は、この世界で生きていく。

それが杉浦の選んだ道だ。俺が口出しできることではない。

あいつを泣かせるようなことをするなよ。処刑は言つまでもなくな。

そういうと、王は涙目になり俺に縋った。

最後まで苛々させるなオイと思いつつも、俺も泣きたくなり、切ない気分になった。

涙と鼻水だらけの顔を見て、王が俺に何をしたかなんてどうでもよくなった。

知りたくもなかった世界を見せてくれた王だが、許してやると思っ

気づけば、学校の固いコンクリートの上だった。

あんまりにも懐かしくて涙が出た。

帰れてよかった、と思うと同時に後悔した。

気まずさや申し訳なさなんて噛み殺して、帰る前にあいつに会わせて欲しいと言えばよかった。

もう、謝罪すらできない。

俺は杉浦が千羽鶴として折った足が生えたキモい鶴を取り出した。俺が握りつぶした形に歪み、更に奇形的となった鶴が俺を恨めしく見つめている。

よく言うフレーズで慰め言葉があるじゃねえか。  
会えないけど空は・・・多分繋がってねえな。異世界だし。

「空は繋がってないけど、このキモい鶴で繋がってる・・・」

決まんねーなおい。

杉浦、何をしてんだろう。

まさか処刑なんてしてないよなあ。あの糞尿王。約束したもんな。

妹姫様はふわふわの笑顔でお茶を振舞ってくれたっけ。

男はできたんだらうか。あー腹立つ。妹姫様も俺に気があるような感じだったのになあ。

妹、となると必然的に弟殿下のことが思い浮かんだ。

杉浦に酷く当たってしまった原因を作ったのも、ほぼあいつのせいだと言ってもいい。

「ああああああ腹立つぜー」



あいつ何がしたかったんだよマジで。

人を病気にさせて楽しいのか？ サドなのか？

男を苦しめて興奮する変態なのか？！

「会いてえなあ」

無意識で漏れた言葉だった。

もしあいつに再会したのなら、あの美顔をぼっこぼこのギッタギタにしてやる。

その途端、世界が真っ暗になった。

停電か、と思う間もなく俺の目の前は弟殿下一色になった。つまり、奴が顔面間近にいた。そして俺は落ちているらしい。ってことは。

0・1秒後の運命を悟り、俺は反射的に悲鳴をあげようと口を開け　文字通りディープなことになった。

俺はこの世界から再び失踪することになる。

糞サド魔法使いを応報と呼ばれる世界から救い上げるために。

坂本くん（最終話）（後書き）

ここまで読んで下さった方々、本当にありがとうございました。  
以下番外編として続くかも知れませんが、本編で消化できなかったことを、応報の世界での弟殿下とDONを通して書いていきたいです。そして、弟殿下が帰って来た後の話。弟殿下の恋の成就（完全な不倫）……できるのでしょうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1555x/>

---

DQNと喪少女がBLファンタジーにトリップした

2012年1月5日00時56分発行